秋　田　市

久　保　田　城　跡

ー秋田駅西北地区土地区画整理事業都市計画道路
千秋久保田町線に伴う三の丸堀跡発掘調査報告書ー

2008.12　秋田市教育委員会

序

秋田市は、秋田市千秋久保田町地内に秋田駅西北地区土地区画整理事業都市計画道路千秋久保田町線を計画しました。しかし、当該地は周知の遺跡である「久保田城跡」の外堀があったところであることから、工事着手前に発掘調査を実施し、遺跡を記録保存することにしました。

調査地は、秋田藩主佐竹氏の家老などが居住していた三の丸と呼ばれた台地の東側である。調査の結果、江戸時代に構築された外堀の西岸部や護岸用の杭列などが確認され、古地図等では明確に分からなかった堀の規模の一部が解明されるなど、久保田城跡を究明する上で貴重な成果を得ることができました。

本報告書は、その調査結果をまとめたもので、文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用していただければ、幸いに存じます。

刊行にあたり、調査にご協力いただきました関係各位の皆様に感謝申し上げますとともに、今後とも、埋蔵文化財の保護につきまして、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

平成20年12月

秋田市教育委員会
教育長　髙　橋　健　一

例　　言

1　本報告書は、秋田駅西北地区土地区画整理事業都市計画道路千秋久保田町線に伴う久保田城三の丸堀跡（秋田市千秋久保田町地内）の緊急発掘調査報告書である。

2　本事業は、事業主体者が秋田市都市整備部秋田駅東地区土地区画整理工事事務所、業務受託者が株式会社 本郷建設工務所、調査担当者が秋田市教育委員会文化振興室の体制で実施した。発掘調査経費は、事業主体者である秋田市都市整備部秋田駅東地区土地区画整理工事事務所が負担した。なお、平成18年度に実施した確認調査は、秋田市教育委員会が調査主体となり、国庫補助金および県費補助金の交付を受けて行った。

3　本報告書の執筆・編集および写真撮影は西谷隆が行い、石郷岡誠一の指導と安田忠市・伊藤才城の協力を得た。

4　出土遺物の陶磁器類については、佐賀県有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に鑑定をお願いした。

5　本報告書刊行以前に、現地説明会資料や報道等により調査成果の一部が公表されているが、本報告書の記載内容をもって正式なものとする。

6　発掘調査、整理作業の過程で、下記の関係機関および各氏より指導、助言、協力を賜った。（敬称略・順不同）

文化庁、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県立博物館、秋田城跡調査事務所、
庄内昭男、日野久

凡　　例

1　図中には下記の略記号を用いた。

　ＳＡ－杭列、ＳＧ－堀跡、ＳＫ－土坑

2　図中の地図には、秋田市管内図１／50,000、同１／25,000、都市計画図１／2,500を使用した。

3　本文中の遺物については、陶磁器・木製品・瓦・銭貨・石器の基礎分類ごとに記述した。

4　実測図の中で、青磁は「青磁」の文字と　　、鉄釉は「鉄釉」の文字と　　の網掛けで図示した。

5　本文中の陶磁器の生産地については、国内産は肥前系・瀬戸美濃系など主要な大規模生産地（地方）に関してその生産地産の製品を主とし、それに直接技術的影響を受けた周辺および地方の窯の製品も含め「系」として示した。また、より具体的生産地として窯を限定できるものについては、秋田県の在地窯である白岩窯のように記述した。

　なお、肥前系陶磁器の産地同定および年代については有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に鑑定を依頼したが、報告文の内容については、ご教示をもとに執筆を行った担当者に責がある。

目　　次

序
例　言
凡　例

第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査の経過 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1
　第３節　整理作業の経過 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
　　（１）周辺の遺跡 …… 3
　　（２）久保田城跡の概要 …… 8

第３章　調査の方法と成果 …… 10
　第１節　調査の方法 …… 10
　第２節　層序 …… 10
　第３節　遺構と遺物 …… 17
　　（１）堀跡 …… 17
　　（２）杭列 …… 19
　　（３）土坑 …… 19
　　（４）遺構外出土遺物 …… 19
　　（５）出土遺物属性表および実測図 …… 21

第４章　まとめ …… 34
　第１節　検出遺構について …… 34
　第２節　出土遺物について …… 35
　第３節　おわりに …… 35

写真図版
報告書抄録

第１章　調査の概要

第１節　調査の経過

秋田市都市整備部秋田駅東地区土地区画整理工事事務所は、秋田駅西北地区と駅東地区の利便を図るため、秋田都市計画道路千秋久保田町線を秋田市千秋久保田町地内に計画した。しかし、当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「久保田城跡」の外堀があったところであることから、秋田市教育委員会との間で開発に伴う事前協議を行った。協議の結果、平成18年８月18日付けで秋田市教育委員会に埋蔵文化財事前調査の依頼があった。これを受けて秋田市教育委員会は、分布調査による現況確認と試掘による範囲確認調査を平成18年12月22日、平成19年1月12日に実施した。調査の結果、江戸時代の久保田城外堀の一部や遺物が確認され、平成19年５月25日付けで秋田市都市整備部秋田駅東地区土地区画整理工事事務所から秋田市教育委員会に土木工事等のための発掘調査に関する通知書（文化財保護法第94条第１項）が提出された。これに対し、範囲確認調査の結果に基づき、平成19年６月６日付け教生－514で、秋田県教育委員会から工事は「恒久的な建築物、道路その他の工作物を設置する場合」に該当するため、事業予定地に対して発掘調査条件の通知があった。

協議の結果、事業主体者が秋田市都市整備部（担当：秋田駅東地区土地区画整理工事事務所）、調査担当者が秋田市教育委員会（担当：文化振興室）となり、平成19年度に発掘調査、平成20年度に整理作業を行うこととした。また、調査費については事業主体者が負担し、発掘作業・整理作業の調査に関わる部分以外に関しては、業務受託することとした。そして、平成19年８月21日付けで事業主体者の秋田市長と調査担当者の秋田市教育委員会、業務受託者の株式会社 本郷建設工務所の３者で発掘調査に関する協定書を結び、整理作業に関しては平成20年９月２日付けで３者で協定書を結び、事業を実施した。

第２節　発掘調査の経過

発掘調査（平成19年度）

発掘調査対象地である千秋公園東側台地（三の丸台地）の東側は、久保田城の外堀があった地域である。平成19年８月７日より調査区に自立式矢板（土留工Ⅱ型鋼矢板、Ｌ＝３～6.5ｍ）の打ち込みを開始した。17日、外堀を埋めて宅地とした近代造成土である第１～２層の除去を開始した。北側に２ｍの土層確認用ベルトを設定し、層を確認しながら掘り進めることとした。８月23日より三の丸斜面の表土剥ぎを開始する。９月３日に斜面下部から礫層が表れている堀の西部平坦地までの精査を開始する。９月４日より堀の埋土である第３層除去を東側から開始する。９月５日より矢板を補強するために腹起こし作業を開始する。９月14日より第４層面以下の掘り下げを開始する。４層以下は湧水が著しく一層毎の除去作業は困難を極め、断面を確認しながら掘り下げを行った。９月19日より三の丸斜面の調査を再び開始する。９月26日より西側から堀内の埋土除去作業を開始する。10月１日より平面実測等を開始する。10月５日より西側から東側に向けて堀内堆積土除去作業を開始する。10月11日より堀の西岸で確認された杭列の精査を行う。10月23日に航空写真撮影を実施した。10月26日に堀内最下層面の精査・記録化が終了した。10月27日に市民を対象とした現地説明会を行い、120名の参加者があった。10月30日より埋め戻し、11月10日より矢板抜き取りを開始し、11月15日に機材の撤収作業を行って、全行程を終了した。

発掘調査体制（平成19年度）

調 査 期 間　　平成19年８月７日～11月15日
調 査 面 積　　360㎡（調査対象面積1,680㎡）
事業主体者　　秋田市都市整備部秋田駅東地区土地区画整理工事事務所
調査担当者　　秋田市教育委員会
調 査 体 制　　秋田市教育委員会文化振興室

文化振興室	室　　長	小　松　正　夫
	参　　事	赤　川　　衛
	課長補佐	加　藤　隆　子
文化財担当	主席主査	西　谷　　隆（調査担当・主務者）
	主席主査	安　田　忠　市
	主　　事	進　藤　　靖
	主　　事	鎌　田　英　智
	主　　事	小　野　隆　志（調査担当）
	主　　事	伊　藤　才　城

業務受託者　株式会社　本郷建設工務所
調査作業員　伊藤弘義、伊藤満、佐藤忠喜、小松田税、倉部博美、石川巌、佐藤兼雄、山本峰吉、松田忠、星野喜一郎、桑原勉、鎌田一夫、加賀谷久仁男、土田節子、伊藤かず子、佐藤良子、秋山良子、佐藤定雄、加藤恪人、斉藤瑞穂、佐藤禎男、大友秋夫、打川智子

第３節　整理作業の経過

整理作業（平成20年度）

平成20年９月４日より出土遺物（10箱）の洗浄を開始した。９月８日から10月20日まで室内整理作業を実施した。接合（９月上旬）、注記（９月上旬）、実測（９月中旬～10月中旬）、トレース（10月上旬～10月中旬）、写真撮影（10月下旬～11月上旬）、版下作成（11月）、編集作業（12月）を実施し、印刷所へ入稿した。なお、12月２日～４日に有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に陶磁器類の鑑定をしていただいた。12月22日までに校正・製本を実施し、全工程を終了した。

整理作業体制（平成20年度）

作 業 期 間　　平成20年９月４日～平成20年12月22日
事業主体者　　秋田市都市整備部秋田駅東地区土地区画整理工事事務所
調査担当者　　秋田市教育委員会
調 査 体 制　　秋田市教育委員会文化振興室

文化振興室	室　　長	石郷岡　誠　一
	参　　事	赤　川　　衛
	室長補佐	加　藤　隆　子
文化財担当	副 参 事	安　田　忠　市
	主席主査	西　谷　　隆（整理担当）
	主　　査	進　藤　　靖
	主　　事	鎌　田　英　智
	主　　事	伊　藤　才　城

業務受託者　株式会社　本郷建設工務所
整理作業員　千葉隆樹、岩谷みゆき、今野祥子、岩谷みどり、田原瑞穂

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

今回の調査対象地である久保田城三の丸堀跡は、JR奥羽本線秋田駅の北西約500ｍの平坦地に位置している（第１図）。秋田市街地の秋田市千秋久保田町地内で、北緯39°43′14″、東経140°7′41″（世界測地系：Ｘ＝－31,078、Ｙ＝－60,173）である。周辺地域は土地区画整理により高層マンション・住宅が建ち、一部は空地となっている（第２図）。

遺跡は、地形分類では千秋公園台地東側の秋田低地にあたる（経済企画庁総合開発局国土調査課編1966、第３図）。秋田低地は新城川以南の南北に細長い沖積低地を示し、三角州平野がこれにあたる。この遺跡の西側に位置する千秋公園台地は標高40ｍ前後で、３段の段丘(40､35､25ｍ)からなっている。いずれも北部に位置する手形山と同様に第四紀系の礫層や含礫砂層(潟西層)からなっている。

第２節　歴史的環境

（１）周辺の遺跡

秋田市教育委員会が昭和61年から63年に作成した『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』（秋田市教育委員会1989）および『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書－改訂版－』（秋田市教育委員会2002）に基づいて、久保田城跡周辺の遺跡について概観する。

近世の遺跡は、久保田城跡の南西500ｍに古川堀反町遺跡（１）、南側600ｍに藩校明徳館跡（２）、東根小屋遺跡（３）、また、北東約1.3㎞に平田篤胤墓（７）、西約２㎞に八橋一里塚（９）、南西約2.1㎞に鋳砲所跡（11）、南東約2.1㎞に金照寺山一ツ森遺跡（12）がある。

古川堀反町遺跡[注1]は、平成16､17年に秋田中央警察署改築事業に伴う緊急発掘調査が実施され、秋田藩の家老が居住していた武家屋敷跡である。藩校明徳館跡[注2]は平成13年に市街地再開発事業に伴う緊急発掘調査が実施され、江戸・明治期の遺構（建物跡・溝跡・井戸跡等）とともに近世陶磁器が出土している。東根小屋遺跡[注3]は平成15、16年に教育・福祉複合施設整備に伴う緊急発掘調査が実施され、秋田藩の上級武士の宅地跡（建物跡・井戸跡等）が発見されている。平田篤胤墓[注4]（国指定史跡）は国学四大大人の一人である平田篤胤（1776～1843）の墓である。八橋一里塚は慶長９年（1604）に江戸日本橋を起点として主要街道の一里ごとに置かれた塚で、八橋一里塚は日本橋から143里である。鋳砲所跡は大砲を鋳造する施設として、秋田藩が安政９年（1859）に建てたところである。金照寺山一ツ森遺跡[注5]は昭和50年にマイクロウェーブ回線中継所新設に伴う緊急発掘調査が秋田考古学協会によって実施され、墳丘状盛り土・掘立柱建物跡・溝跡と、江戸時代初期の唐津焼の小物、江戸時代中期の七輪などが発見されている（第４図）。

注１　『古川堀反町遺跡－秋田中央警察署改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県教育委員会　2008年３月

注２　『秋田市　藩校明徳館跡－市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書－』秋田市教育委員会　20002年２月

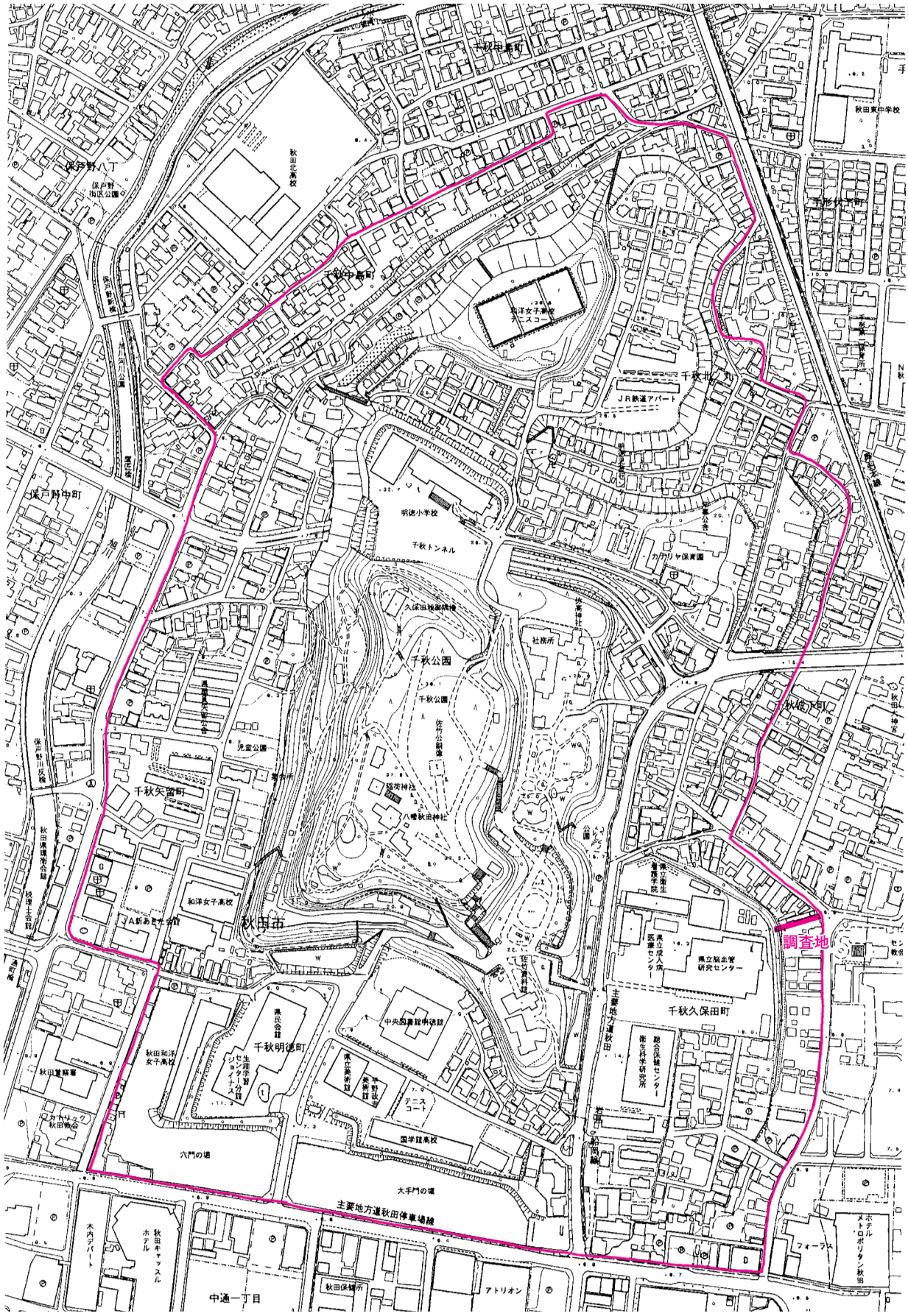
注３　『東根小屋遺跡－秋田県教育・福祉複合施設整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県教育委員会　2005年３月

注４　『秋田県の文化財』　秋田県教育委員会　1989年３月

注５　『秋田市金照寺山一ツ森遺跡発掘調査報告書』　秋田考古学協会　1976年２月

【参考文献】
『秋田市史第三巻　近世通史編』秋田市　2003年
渡部景一　『図説　秋田市歴史地図』無明舎出版　1984年

第1図　遺跡位置図（S=1/50,000）


調査地
千秋公園
千秋矢留町
千秋明徳町
千秋久保田町
秋田市
秋田北高校
秋田東中学校
和洋女子高校
明徳小学校
千秋トンネル
JR鉄道アパート
カトリック保育園
県立成人病医療センター
県立脳血管研究センター
総合保健センター
衛生科学研究所
中央図書館県立館
県民会館
県立美術館
国学館高校
秋田和洋女子高校
JA新あきた会館
秋田県庁
秋田保健所
アトリオン
中通一丁目
大手門の堤
穴門の堤
主要地方道秋田停車場線
秋田キャッスルホテル
ホテルメトロポリタン秋田
フォーラス
秋田八幡神社
八橋秋田神社
千秋下町
千秋中島町
保戸野八丁
保戸野中町
保戸野新橋
旭川
旭川公園
秋田保健所公園
秋田県庁公園
秋田県警察本部
秋田県警察公会堂
秋田県立図書館
秋田県庁
秋田県議会
秋田和洋女子高校
カトリック秋田教会
秋田警察署
秋田市役所
秋田市保健所
秋田市公会堂
秋田市公園
秋田市公園
秋田市公園

山地及び丘陵地
台　地
低　地
旧河道

M：山地及び丘陵地、G：台地、V：谷底平野
Ns：自然堤防及び砂堆、D：三角州、B：河原及び浜
Su：被覆砂丘（上位）、Sl：被覆砂丘（下位）、Aw：旧可道
Af：人工平坦地及び埋立地

第3図　地形分類図（S=1/50,000）

第4図　周辺の遺跡（S=1/25,000）

表１　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	遺構・遺物
1	古川堀反町遺跡	武家屋敷跡	秋田市千秋明徳町	近世	建物跡：瓦・銅製品・鉄製品・ガラス製品・近世陶磁器
2	藩校明徳館跡	学校跡	秋田市中通一丁目	近世	掘立柱建物跡・柱列・井戸跡・溝跡・土坑：近世陶磁器
3	東根小屋町遺跡	武家屋敷跡	秋田市中通二丁目	近世	柱列・井戸跡・溝跡・土坑・柱穴：近世陶磁器・土器・木製品・金属製品・銭貨・動物遺体・種実遺体
4	蛇野遺跡	遺物包含地・城館	秋田市広面字蛇野、推子、大沢	縄文・奈良・平安・中世	石器・赤褐色土器
5	柳沢遺跡	集落跡	秋田市広面字柳沢他	縄文	竪穴住居跡・土坑：縄文土器・石器
6	桜田邸内遺跡	遺物包蔵地	秋田市広面字赤沼	縄文	縄文土器片（後期）
7	平田篤胤墓	墓地	秋田市手形字大沢	近世	
8	一ノ坪条里制遺構	条里制遺構	秋田市保戸野八丁、泉一ノ坪他	奈良・平安	条里制遺構
9	八橋一里塚	一里塚	秋田市八橋本町一丁目	近世	
10	鋳砲所跡	遺物包含地	秋田市山王六丁目	平安・近世	赤褐色土器・須恵器・鉄滓
11	鍋子山遺跡	遺物包含地	秋田市川元松丘町	縄文	縄文土器
12	金照寺山一ツ森遺跡	塚	秋田市楢山金照町	近世	墳丘状盛り土・掘立柱建物跡：唐津焼・寛永通宝
13	七ツ森遺跡	塚	秋田市楢山金照町		塚
14	香奇館	城館	秋田市東通明田	中世	帯郭・腰郭

（２）久保田城跡の概要

久保田城跡は、秋田藩主佐竹氏12代約270年間の居城で、現在の千秋公園一帯がその範囲である。

慶長７年（1602）に常陸国水戸城（茨城県水戸市）から秋田に転封された佐竹義宣（1570～1633）は、当初旧藩主安東実季（1576～1659）の居城であった土崎湊城に入城した。しかし、海岸に近い湊城は狭小の平城であることから、家臣団の居住地の確保と諸施設の建設用地等の収容能力的な問題や、防御的な不安などから新城を築くこととなった。そこで、寺内山と久保田神明山を候補地としてあげ、実地検分の結果、仁別川（旭川）を西方に移すことを前提に久保田神明山を選定し、翌年の慶長８年（1603）５月に着工した。神明山には川尻村の肝煎である豪族三浦氏（後の川尻氏）の氏神（後に川尻総社神社）や数軒の人家があったが、それぞれを移転させている。そして、城は未完成であったが約１年後の同９年（1604）８月には湊城を破却して新城へ移り、それ以降も継続して城の整備を続けた。

久保田城は、本丸・二の丸・三の丸・北の丸からなっている。本丸は東西65間（約117ｍ）、南北120間（216m）で、藩主の住居である本丸御殿や政務所等が置かれ城の中枢となっている。本丸は台地の最も高台に位置し、一面を平らにして外周には土塁を巡らし、土塁の間には４箇所の門（表門・裏門・帯曲輪門・埋門）と５箇所の切戸口を設けていた。そして、門を除く土塁の上には多聞長屋を建て、多聞長屋のない部分は板塀となっているなど、城内を厳重に守り固めていた。また、北西隅には御隅櫓（新兵具庫）、南西隅には御出書院が置かれていた。

二の丸は東西39間（約70ｍ）、南北240間（432ｍ）で、諸役所（境目方役所・勘定方役所等）や金蔵・厩等が置かれていた。この二の丸は本丸の正面としての玄関口にあたり、外部からの道はすべてここに集まり、内堀を渡る橋４箇所には門（黒門・松下門・不浄門・土門）を設け、足軽番所を置いて警備していた。

三の丸は二の丸の北・東・南の３方をコの字型に囲んでいる一段低い地区である。二の丸を囲む内堀と町を画する外堀の間にあり、家老級の重臣の屋敷等が置かれていた。三の丸は３つの地域からなっており、二の丸東方で大手門と大手北の門との間の高地を上中城、二の丸南方の低地を下中城、上中城から北へ続く北の丸を山の手という。

三の丸地域の詳細な記録は少ないが、規模については東西64間（約115ｍ）、南北144間（約259ｍ）と台地の大きさが記載されている。(注1) 三の丸地区に居住していた家臣については名前が記載された絵図がいくつかあり、調査地の西側台地北部には真崎家、梅津家、真壁家などの名前が見える。東側の外堀は長さが520間（約936ｍ）、幅18間（約32ｍ）から13間（約23ｍ）と幅が不同であることが記載されている。(注2)

北の丸は城域の北端に位置し、二の丸から長橋を渡って北へ進んだところで、籾蔵や大木屋が置かれていた。

久保田城を取り囲む堀は、本丸と二の丸を内堀で、三の丸や城の正面に位置する家老の渋江家・梅津家屋敷南側、さらに本丸と旭川の間を外堀で囲んでいる。そして、旭川を第３の堀として活用し、東側外堀の東側には長沼と呼ばれる湿地が存在していた。

また、久保田城下の町割りについては旭川を境にして侍町（内町）と町人町（外町）に分離し、さらに町人町の西側には寺町を配して整備した。

注１、注２　『国典類抄』第12巻賓部２

【引用・参考文献】

秋田市　『秋田市史 第三巻 近世 通史編』　2003年

秋田市教育委員会　『秋田市久保田城跡－表門復元に伴う発掘調査報告書－』2001年3月

渡部景一　『久保田城物語』無明舎出版　1989年12月

渡部景一　『図説　秋田市歴史地図』無明舎出版　1984年

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

調査対象地とした千秋久保田町地内は平成18年度の試掘調査結果により、外堀の一部で軟弱地盤であるため、調査区に自立式矢板（土留工Ⅱ型鋼矢板、Ｌ＝３～6.5ｍ）の打ち込みを行うとともに、掘り下げの途中で安全確保のための補強として２段にわたり腹起こしを実施した。埋土は層を確認しながらバックホーを利用し、適宜作業員による手掘りで掘り下げた。

調査区は任意で設定し、調査対象地に一区画４×４ｍのグリッドを設定した（第５図）。グリッドの南北軸は真北に合せ、グリッド南北軸に直行するグリッド東西軸を設定した。グリッド南北軸に算用数字、グリッド東西軸に２文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の交点で両者を組み合わせてグリッド名とした。また、グリッド杭とは別に、世界測地系に基づいた座標杭を各３点設置した。各座標杭は下記のとおりである。

Ａ：（Ｘ＝－31,090.000　Ｙ＝－60,185.000）、Ｂ：（Ｘ＝－31,078.000　Ｙ＝－60,185.000）

Ｃ：（Ｘ＝－31,090.000　Ｙ＝－60,189.000）

遺物の取り上げは、グリッド名・層位名等を記録したグリッド上げを基本とし、適宜、出土地点を記録して取り上げた。遺構平面図・断面図・土層断面図は、１／20の縮尺で作成した。遺構写真は35㎜版を使用し、モノクロフィルムおよびリバーサルフィルムで記録した。遺物は調査終了時で、55×34×15㎝のコンテナで約10箱である。遺物は洗浄・接合・注記・復元作業を行い、実測図を１／１で作成した。遺物写真は35㎜版を使用し、モノクロフィルムおよびリバーサルフィルムで撮影した。

第２節　層序

調査区の層序は、堀部分と台地から堀に向かう斜面とに分類され、詳細は下記のとおりである（第６図）。

堀

第１層（表土）暗褐色土（10YR3/3）。廃材・礫が混じる造成土

第２層（近代造成土）黒色石炭残滓層。堀埋め立ての際に廃棄されたもの

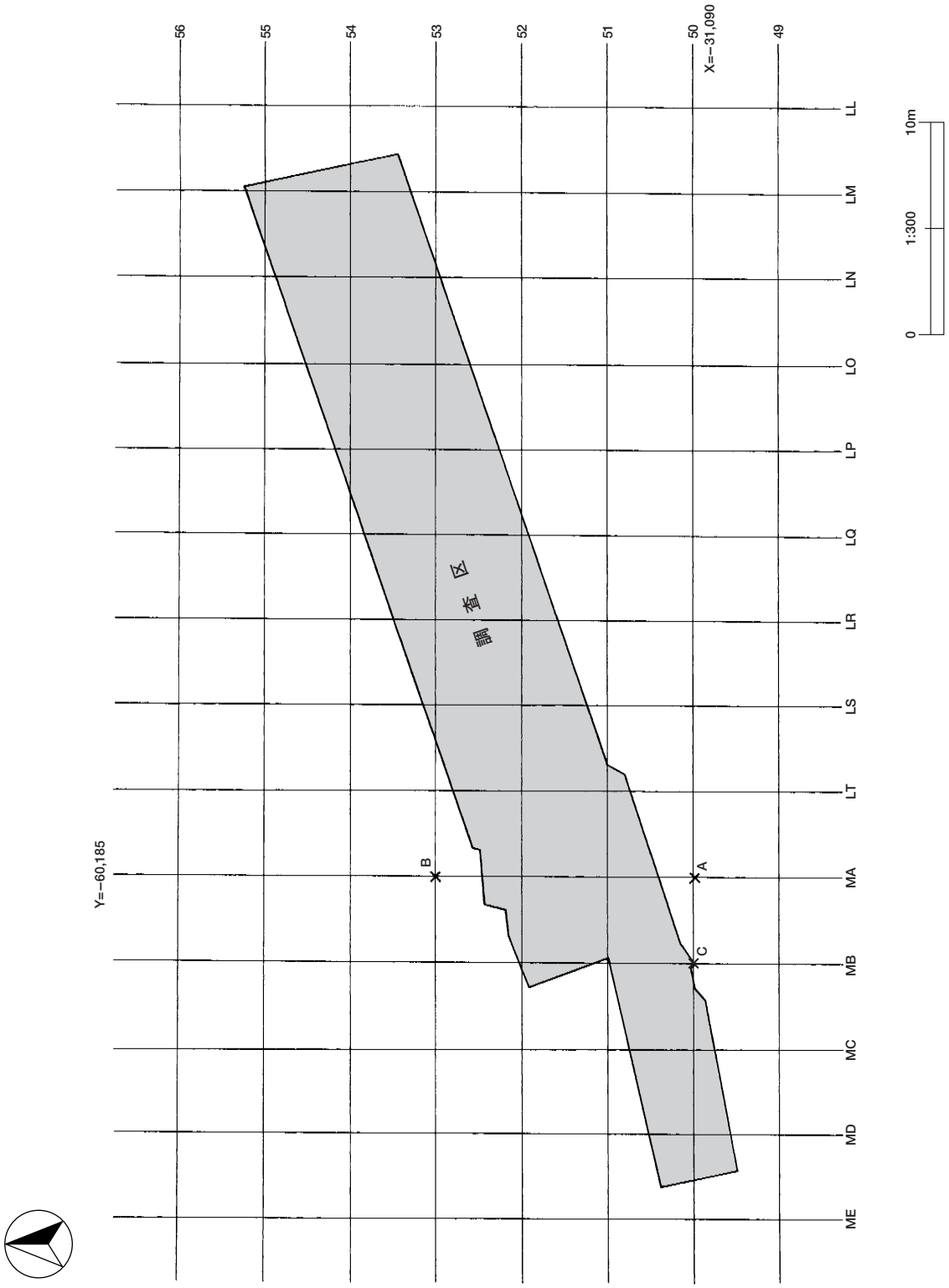
第３層（近代造成土）褐灰色粘土（10YR6/1）。場所によって第３a層（灰色粘土〔５Y4/1〕に黄褐色粘土〔2.5YR5/4〕が混じる）・第３b層（暗オリーブ褐色粘土〔５Y3/3〕に黄褐色粘土ブロック・礫が混じる）・第３ｃ層（オリーブ黒色粘土〔５Y3/2〕に礫が混じる）・第３ｄ層（黒色粘土〔2.5Y3/1〕に植物腐植土が混じる）・第３ｅ層（オリーブ黒色粘土〔５Y3/1〕にオリーブ褐色粘土〔2.5Y4/4〕と礫が混じる）・第３f層（暗オリーブ褐色粘土〔2.5Y3/3〕に灰色砂礫層〔５Y4/1〕が混じる）・第３g層（オリーブ黒色粘土〔５Y3/2〕に植物腐植土混じる）・第３h層（黒褐色粘土〔2.5Y3/1〕に黄褐色砂質土〔2.5YR5/4〕が混じる）が入る。

第４層（堀埋土）黒褐色粘土（2.5Y3/1）

第５層（堀埋土）黒色粘土 （10Y2/1）

第６層（堀埋土）黒色粘土（7.5Y2/1）にオリーブ黒色粘土（7.5Y3/2）が混じる

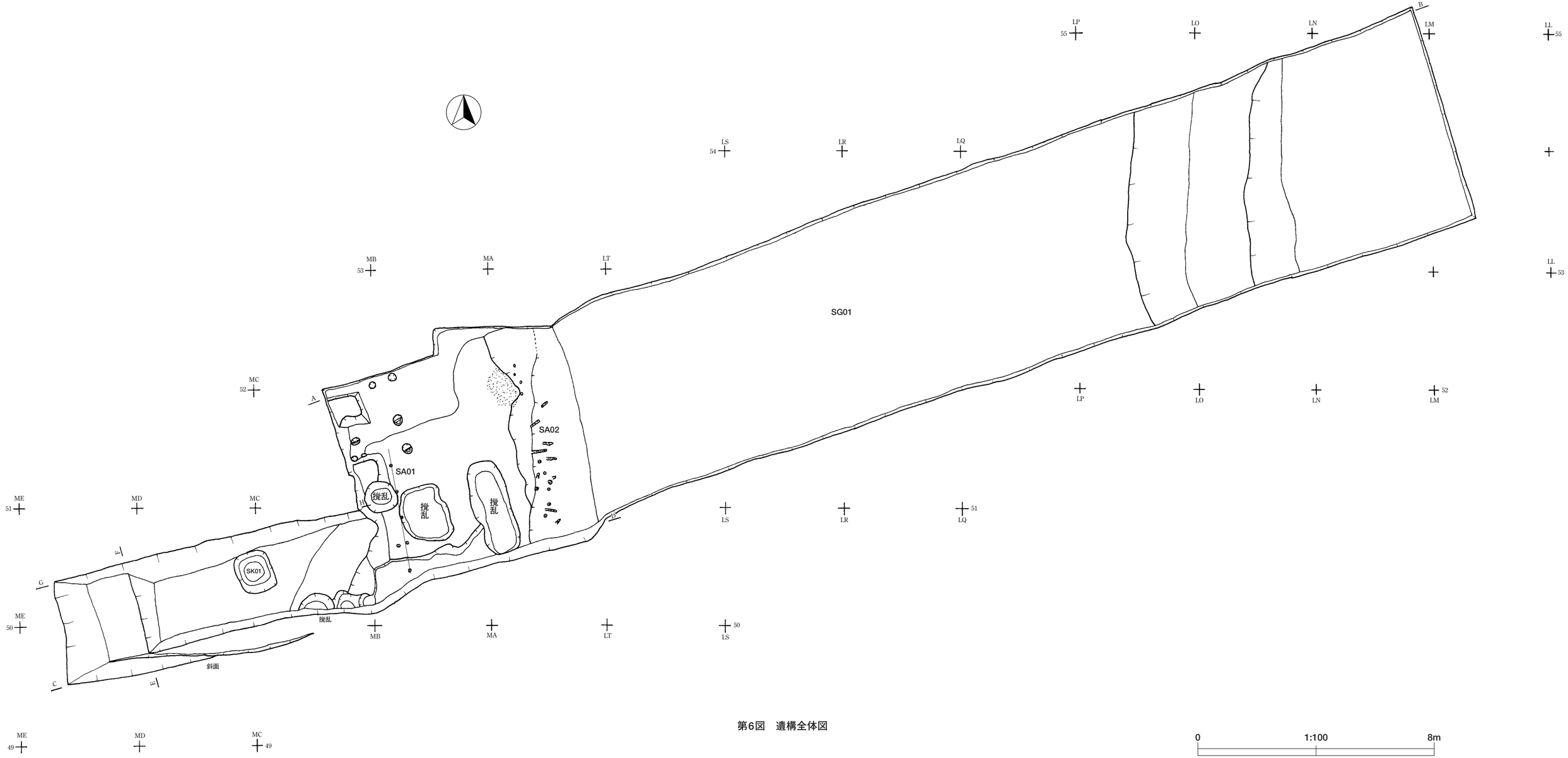
第７層（堀埋土）オリーブ黒色粘土（５Y3/1）


56
55
54
53
52
51
50
X=−31,090
49
LL
LM
LN
LO
LP
LQ
LR
LS
LT
MA
MB
MC
MD
ME
Y=−60,185
A
B
C
遺構面
0
1:300
10m

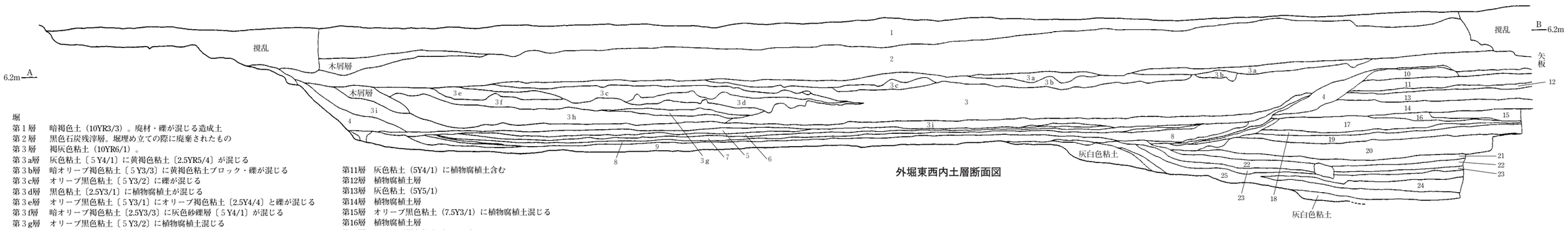
第5図　グリッド配置図

第８層（堀埋土）黒色粘土（５Y2/1）
第９層（堀埋土）黒色粘土（2.5Y2/1）
第10層（堆積土）黒色粘土（2.5Y2/1）に植物腐植土含む
第11層（堆積土）灰色粘土（5Y4/1）に植物腐植土含む
第12層（堆積土）植物腐植土層
第13層（堆積土）灰色粘土（5Y5/1）
第14層（堆積土）植物腐植土層
第15層（堆積土）オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）に植物腐植土混じる
第16層（堆積土）植物腐植土層
第17層（堆積土）オリーブ黒色粘土（５Y3/1）
第18層（堆積土）灰色粘土（7.5Y3/1）。植物腐植土層が多量に混じる
第19層（堆積土）黒色粘土（2.5Y2/1）にオリーブ黒色粘土（５Y3/2）混じる
第20層（堆積土）暗オリーブ色粘土（５Y4/4）に黒色粘土（５Y2/1）と植物腐植土混じる
第21層（堆積土）暗オリーブ色粘土（５Y4/4）と植物腐植土の互層
第22層（堆積土）黒色粘土（５Y2/1）と暗オリーブ色粘土（５Y4/4）の互層
第23層（堆積土）オリーブ黒色粘土（５Y3/2）に小礫が混じる
第24層（堆積土）オリーブ灰色粘土（５GY5/1）
第25層（堆積土）黒色粘土（５Y2/1）に灰色粘土（7.5Y3/1）が混じる

斜面
第１層（表土）黒褐色土（10YR3/1）。造成土
第２層（近代造成土）黒褐色土（10YR3/1）に礫が多量に混じる
第３層（近代造成土）褐灰色土（10YR4/1）に礫・炭化物が多量に混じる
第４層（造成土）黄褐色粘土（10YR5/6）に灰黄褐色土（10YR4/2）が混じる
第５層（造成土）灰黄褐色土（10YR4/2）にオリーブ褐色粘土（10YR4/4）
第６層（造成土）灰黄褐色土（10YR4/2）に黄褐色粘土（10YR5/6）ブロック少量混じる
第７層（造成土）にぶい黄褐色土（10YR4/3）に明黄褐色粘土（10YR6/6）ブロック・小礫混じる
第８層（造成土）黒褐色土（10YR3/1）ににぶい黄褐色粘土（10YR5/4）少量混じる
第９層（造成土）にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）に褐色粘土（10YR4/6）ブロック・礫多量に混じる
第10層（造成土）にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）に黒褐色粘質土（10YR3/1）・礫混じる
第11層（造成土）黒褐色粘質土（10YR3/1）ににぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）・礫混じる
第12層（造成土）黒褐色粘質土（10YR3/1）に礫混じる
第13層（堆積土）明黄褐色砂質土（10YR6/6）
第14層（堆積土）黒褐色粘質土（2.5Y3/1）
第15層（堆積土）黒褐色粘質土（2.5Y2/1）
第16層（堆積土）黒色粘土（植物腐植土）
第17層（堆積土）黒褐色粘土（2.5Y2/1）に植物腐植土混じる
第18層（堆積土）黒褐色粘土（10YR2/2）にオリーブ黒色粘土（５Y3/2）が混じる
第19層（堆積土）黒褐色粘土（2.5Y3/1）に植物腐植土混じる
第20層（堆積土）にぶい黄褐色砂（10YR4/3）
第21層（堆積土）黒褐色土（10YR2/2）に褐色粘土（10YR4/6）ブロック混じる
第22層（堆積土）黒色土（10YR7/1）に植物腐植土混じる
第23層（堆積土）にぶい黄褐色土（10YR5/4）に小礫混じる
第24層（堆積土）黒褐色土（10YR3/3）に小礫混じる
第25層（堆積土）にぶい黄橙色砂礫層（10Y/）
第26層（堆積土）黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土（10YR4/4）ブロック少量・礫多量混じる
第27層（堆積土）黒色土（10YR2/1）に黄褐色土（10YR4/4）ブロック少量・礫多量混じる
第28層（堆積土）黒色土（10YR2/1）に礫混じる
第29層（堆積土）褐色粘土（10YR4/6）に礫多量に混じる

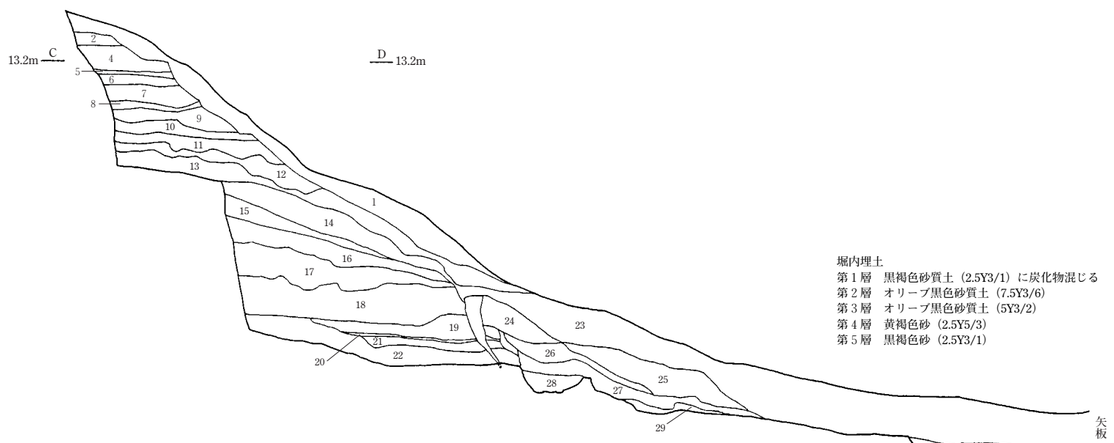

SG01
SA01
SA02
SK01
撹乱
斜面
A
B
C
G
H
LP
LO
LN
LM
LL
LS
LR
LQ
LT
MA
MB
MC
MD
ME
55
54
53
52
51
50
49
0
1:100
8m

第6図　遺構全体図



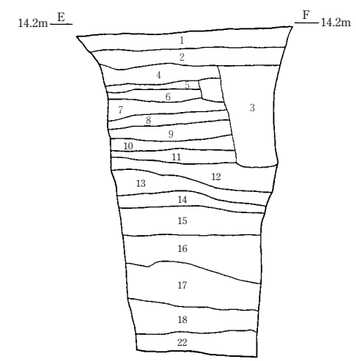
外堀東西内土層断面図

堀
第１層　暗褐色土（10YR3/3）。廃材・礫が混じる造成土
第２層　黒色石炭残滓層。堀埋め立ての際に廃棄されたもの
第３層　褐灰色粘土（10YR6/1）。
第３a層　灰色粘土〔５Y4/1〕に黄褐色粘土〔2.5YR5/4〕が混じる
第３b層　暗オリーブ褐色粘土〔５Y3/3〕に黄褐色粘土ブロック・礫が混じる
第３c層　オリーブ黒色粘土〔５Y3/2〕に礫が混じる
第３d層　黒色粘土〔2.5Y3/1〕に植物腐植土が混じる
第３e層　オリーブ黒色粘土〔５Y3/1〕にオリーブ褐色粘土〔2.5Y4/4〕と礫が混じる
第３f層　暗オリーブ褐色粘土〔2.5Y3/3〕に灰色砂礫層〔５Y4/1〕が混じる
第３g層　オリーブ黒色粘土〔５Y3/2〕に植物腐植土混じる
第３h層　黒褐色粘土〔2.5Y3/1〕に黄褐色砂質土〔2.5YR5/4〕が混じる
第３i層　黒褐色粘土〔2.5Y3/2〕に礫、砂多量に混じる
第４層　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
第５層　黒色粘土（10Y2/1）
第６層　黒色粘土（7.5Y2/1）にオリーブ黒色粘土（7.5Y3/2）が混じる
第７層　オリーブ黒色粘土（５Y3/1）
第８層　黒色粘土（５Y2/1）
第９層　黒色粘土（2.5Y2/1）
第10層　黒色粘土（2.5Y2/1）に植物腐植土含む
第11層　灰色粘土（5Y4/1）に植物腐植土含む
第12層　植物腐植土層
第13層　灰色粘土（5Y5/1）
第14層　植物腐植土層
第15層　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）に植物腐植土混じる
第16層　植物腐植土層
第17層　オリーブ黒色粘土（５Y3/1）
第18層　灰色粘土（7.5Y3/1）。植物腐植土層が多量に混じる
第19層　黒色粘土（2.5Y2/1）にオリーブ黒色粘土（５Y3/2）混じる
第20層　暗オリーブ色粘土（５Y4/4）に黒色粘土（５Y2/1）と植物腐植土混じる
第21層　暗オリーブ色粘土（５Y4/4）と植物腐植土の互層
第22層　黒色粘土（５Y2/1）と暗オリーブ色粘土（５Y4/4）の互層
第23層　オリーブ黒色粘土（５Y3/2）に小礫が混じる
第24層　オリーブ灰色粘土（５GY5/1）
第25層　黒色粘土（５Y2/1）に灰色粘土（7.5Y3/1）が混じる

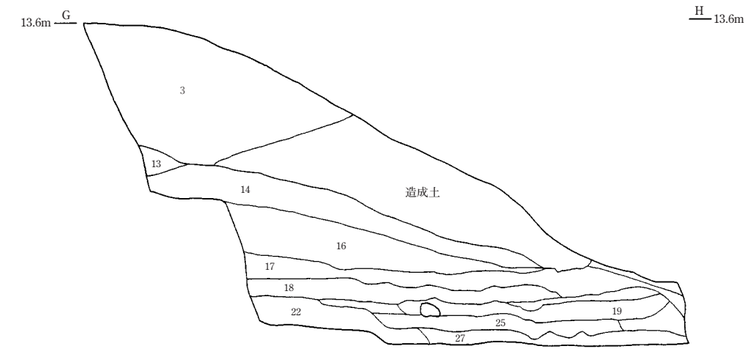


堀内埋土
第１層　黒褐色砂質土（2.5Y3/1）に炭化物混じる
第２層　オリーブ黒色砂質土（7.5Y3/6）
第３層　オリーブ黒色砂質土（5Y3/2）
第４層　黄褐色砂（2.5Y5/3）
第５層　黒褐色砂（2.5Y3/1）

台地斜面南側土層断面図



西壁土層断面図



台地斜面北側土層断面図

斜面
第１層　黒褐色土（10YR3/1）造成土
第２層　黒褐色土（10YR3/1）に礫が多量に混じる
第３層　褐灰色土（10YR4/1）に礫・炭化物が多量に混じる
第４層　黄褐色粘土（10YR5/6）に灰黄褐色土（10YR4/2）が混じる
第５層　灰黄褐色土（10YR4/2）にオリーブ褐色粘土（10YR4/4）
第６層　灰黄褐色土（10YR4/2）に黄褐色粘土（10YR5/6）ブロック少量混じる
第７層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）に明黄褐色粘土（10YR6/6）ブロック・小礫混じる
第８層　黒褐色土（10YR3/1）ににぶい黄褐色粘土（10YR5/4）少量混じる
第９層　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）に褐色粘土（10YR4/6）ブロック・礫多量に混じる
第10層　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）に黒褐色粘質土（10YR3/1）・礫混じる
第11層　黒褐色粘質土（10YR3/1）ににぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）・礫混じる
第12層　黒褐色粘質土（10YR3/1）に礫混じる
第13層　明黄褐色砂質土（10YR6/6）
第14層　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）
第15層　黒褐色粘質土（2.5Y2/1）
第16層　黒色粘土（植物腐植土）
第17層　黒褐色粘土（2.5Y2/1）に植物腐植土混じる
第18層　黒褐色粘土（10YR2/2）にオリーブ黒色粘土（５Y3/2）が混じる
第19層　黒褐色粘土（2.5Y3/1）に植物腐植土混じる
第20層　にぶい黄褐色砂（10YR4/3）
第21層　黒褐色土（10YR2/2）に褐色粘土（10YR4/6）ブロック混じる
第22層　黒色土（10YR7/1）に植物腐植土混じる
第23層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）に小礫混じる
第24層　黒褐色土（10YR3/3）に小礫混じる
第25層　にぶい黄橙色砂礫層（10Y/）
第26層　黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土（10YR4/4）ブロック少量・礫多量混じる
第27層　黒色土（10YR2/1）に黄褐色土（10YR4/4）ブロック少量・礫多量混じる
第28層　黒色土（10YR2/1）に礫混じる
第29層　褐色粘土（10YR4/6）に礫多量に混じる

0　1:100　4m

第7図　土層断面図

第３節　遺構と遺物

調査区では堀・杭列・土坑が検出された。（第７図）。

（１）堀跡（第６・７図、図版１～４）

堀は三の丸台地と呼ばれた東側台地の裾野から市道までの間のLL～LT－50～54グリッドに及ぶ範囲で検出され幅33ｍ、深さ２～５ｍの規模で検出されたが、東側の岸部は確認されなかった。堀の埋土上層（１層～９層）は明治以降に堀を埋め立てた造成土で、堀は、西側の護岸部と考えられる２号杭列付近から急激に落ち始め、約37度の角度で底部である砂礫層に達する。この地点での底部までの深さは約2.1ｍである。堀の底部となっている砂礫層は約19ｍほど東に向かって水平に続き、この地点から約10度の角度で東にむかって掘られている。発掘区東側では護岸部は確認されなかったことから、本来の護岸は市道付近にあるものと想定される。堀の造成土掘削途中で東側矢板から西へ4.4ｍまでの範囲で灰色を呈した粘土の平坦面と傾斜面を確認したが、性格は不明である。

堀跡出土遺物

堀内の造成土である第２層から第４層で遺物が出土した。以下層ごとに記述する。

第２層出土遺物

陶磁器（第11図、図版５）

［**磁器**］１～７は磁器である。

（碗類）１は肥前系磁器染付碗である。外面には雲海を渡る「龍」を、内面上部には雷文を染付けている。２は瀬戸系磁器碗である。高台内面には「瀬729」と刻印されている、戦時中の統制品と考えられる。

（皿類）３、４は産地不明の磁器染付皿である。３の内面見込み部には山水文を染付けている。４の内部には鳳凰を染付けている。５は肥前系磁器染付皿である。内面に蛸唐草文、見込み部に環状の松竹梅文を、外面には唐草文を染付けている。体部に焼継痕がある。６は産地不明の磁器染付皿である。銅板刷りで文様を染付けている。

（鉢類）７は銅板刷りで龍を染付けている。

木製品（第17図、図版11、12）

１、３、４は楕円形の連歯下駄である。３は刳り下駄、４は丸型の刳り下駄である。７～15は一方の先端を尖らせている片口箸である。

瓦（第19図、図版13）

１～５は釉薬が施された桟瓦である。６は灰色を呈するいぶし瓦の破片である。

銭貨（第20図）

１は新寛永通宝である。

第３層出土遺物

陶磁器（第12図、図版５～９）

［陶器］８、９は陶器である。

（甕類）８は産地不明の陶器甕である。内外面に鉄釉を施し、その上から外面上部、内面口唇部になまこ釉を施している。９は白岩窯産鉢である。内外面に鉄釉を施し、その上からなまこ釉を施している。

［磁器］10～40は磁器である。

（碗類）10～17は肥前系磁器染付碗である。10は外面体部に「福壽」を染付けている。11は外面体部に花文を染付ている。12は体部外面に鈍く濁った色をした呉須で文様を染付けている。13は体部外面にコンニャク印判による文様を染付けている。14は体部内面上部に四方襷文を巡らし、その下部には草花文を、体部外面には牡丹唐草文を染付けている。15は青磁碗で、外面には青磁釉、内面上部に四方襷文を染付けている。16は端反碗蓋である。体部内外面に山水文を染付けている。17は体部外面に漢詩を、内面見込み部に文様を染付けている。体部には焼継痕がある。18は産地不明の磁器染付端反碗蓋である。体部外面に草花文、「□□祥□」銘を染付けている。19～20は瀬戸美濃系磁器染付碗である。

（皿類）21～27、30は肥前系磁器染付皿である。21は体部外面に梅花文、外面には唐草文を染付けている。口唇部には口紅を施している。22は体部外面に二重圏線、見込み部に文様を染付けている。23は体部内面に草花文、外面に唐草文を染付けている。24は体部内面に半菊唐草文、外面には唐草文を染付けている。25は小皿で体部外面に文様を染付けている。26は体部外面に蛸唐草文、見込み部に松竹梅を染付けている。27は体部内面にみじん唐草、外面には唐草文を染付けている。28は産地不明の磁器染付皿である。内面には山水文を染付けている。29は産地不明の磁器染付皿である。高台内面に「宣徳大明」の銘がある。30は大皿である。二重圏線内側に山水文を染付けている。31は産地不明の磁器染付皿である。内面には龍および草花文を、外面に雲文、草花文を染付けている。「乾」（篆書体）の銘がある。

（鉢類）32、33は肥前系磁器染付段重である。32は口唇部が無釉で、体部外面に宝文を染付けている。体部には焼継痕がある。33は底部立上がり部分に波状の文様を染付けている。34は産地不明の蓋付鉢で、体部に波状の文様を染付ている。35は産地不明の磁器染付鉢で、コバルト釉で体部内外面に草花文を染付ている。底部は蛇の目凹形高台となっている。

（壺類）36は肥前系磁器染付油壺である。体部に蛸唐草文を染付けている。

（仏飯器）37は肥前系磁器染付仏飯器で、底部内面は無釉である。器壁はやや厚手である。

（その他）38は産地不明の磁器染付盃で、内面に山水文を染付けている。39は瀬戸美濃系磁器碗類で、鉄釉、あめ釉で文様を染付けている。底部に「岐69」と刻印されている。戦時中の統制品と考えられる。40は肥前系磁器染付皿類で、底部に「有82」と刻印されている。戦時中の統制品と考えられる。

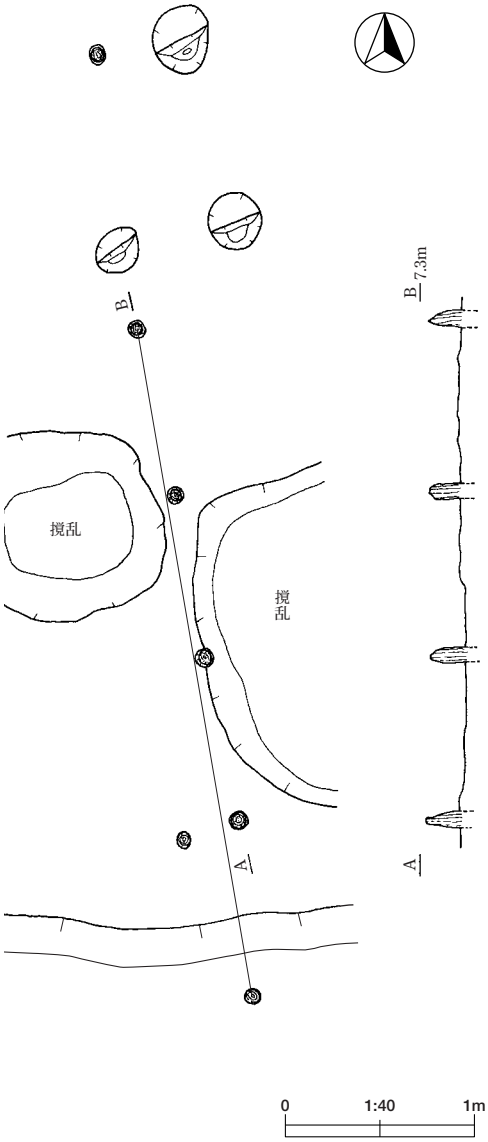
木製品（第17、18図、図版11、12）

２は角型の連歯下駄である。鼻緒を止める前緒の孔（眼）の後ろに３個の小さな穴が穿たれている。５、６は露卯下駄および差歯である。17は曲物底部で、18は用途不明の木製品である。

第４層出土遺物

陶磁器（第14図、図版９）

［**陶器**］41は産地不明の鉢である。



第8図　1号杭列

（２）杭列（第８、９図、図版３）

１号杭列（第８図、図版３）

調査区西側のMA－50～51グリッドで検出された。南北方向の杭列で、まっすぐに打ち込まれている。方向は北で約11度西に振れている。杭間隔は90～95㎝で、深さは確認面から約20㎝である。杭材は丸杭である。

２号杭列（第９図、図版３）

調査区西側の外堀護岸部LT－51～52で検出された。南北方向の２列の杭列で、まっすぐに打ち込まれたものと斜めに打ち込まれたものがある。方向は北で約12度西に振れている。杭間隔は約50㎝間隔である。深さは確認面から10㎝である。杭材は樹皮が付いた丸杭である。

（３）土坑（第10図、図版３）

１号土坑（第10図、図版３）

調査区西側MB～MC－50グリッドで検出された。平面形は隅丸方形で、長軸1.4ｍ、短軸1.2ｍ、深さは確認面から約1.1ｍである。礫層を掘り込んでおり、底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。

（４）遺構外出土遺物（第15、16、20図、図版９、10、12）

調査区域の中で三の丸と外堀の間の斜面から遺物が出土している。ここでは、造成土から出土した遺物のうち、江戸期等の遺物について述べることとする。

三の丸造成土出土遺物

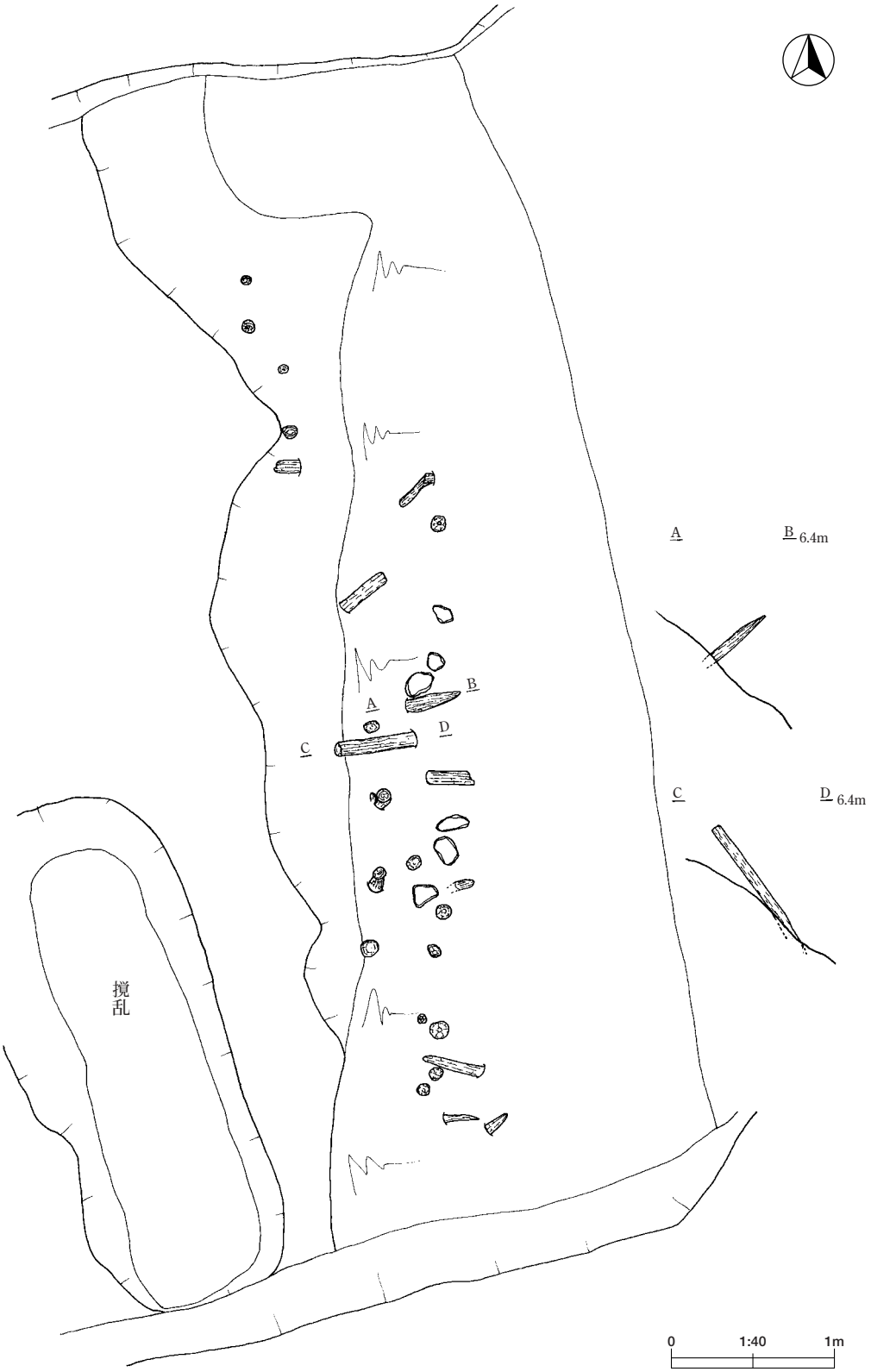
〔**陶磁器**〕（第15図、図版９、10）

〔**陶器**〕42～44は陶器である。

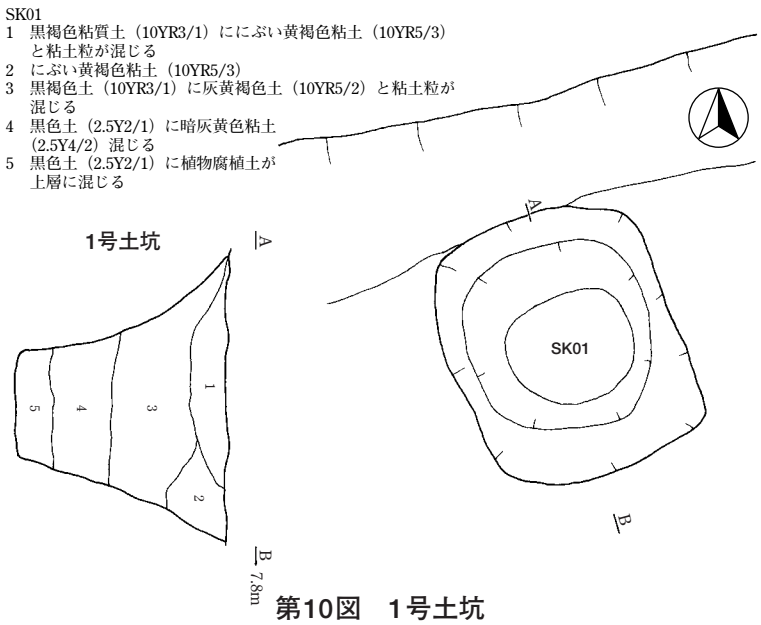
（碗類）42は肥前系陶器碗で、体部には刷毛目文が施されている。

（皿類）43は肥前系灰釉陶器溝縁皿である。見込み部および高台に砂目積痕がある。

（鉢類）44は産地不明の鉢である。体部内外面に鉄釉が施されている。



第9図　2号杭列



第10図　1号土坑

〔**磁器**〕45～47は磁器である。

（碗類）45、46は肥前系磁器染付碗である。45は体部外面に雲文を染付けている。46は内面に牡丹唐草文、外面に唐草文を染付けている。

（鉢類）47は肥前系磁器染付蓋付鉢である。体部外面に草花文を染付けている。

三の丸斜面出土遺物

〔**陶磁器**〕（第15図、図版10）

〔**磁器**〕48～57は磁器である。

（碗類）48、49は肥前系磁器染付碗である。48は体部内面に四方襷文を染付けている。49は体部内面周縁部に雷文、外面に草花文を染付けている。50は産地不明の西洋コバルト釉を用いた型紙刷りの碗である。

（皿類）51～56は肥前系磁器染付皿である。52は内面に蛸唐草文、外面には牡丹唐草文を染付けている。53の見込み部は蛇の目釉剥ぎで体部外面は一部無釉である。54の見込み部には五弁花文を染付けている。55は外面に鳳凰の一部を染付けている。56は体部内面に唐草文を染付けている。57の内面には龍を染付けている。蛇の目凹形高台で、「冨貴長春」の銘がある。

石器（第20図）

１は削器である。２は篦状石器である。３は磨製石斧で、上部が欠損している。

（５）出土遺物属性表および実測図

表１～表４、第11図～20図に出土遺物の属性表および実測図を掲載した。表１～表４の凡例は下記のとおりである。

凡例

1　陶磁器・木製品・石器・瓦・銭貨の基本分類ごとに番号を付与した。

2　図番号は、実測図の番号と一致している。

3　陶磁器について、分類では陶器・磁器に分類を行った。また、施釉や絵付けにより、染付・青磁等の細分が可能であり、「特徴」欄に記載した。

4　陶磁器では、国内産については肥前系・瀬戸美濃系等、主要な大規模生産地（地方）に関し、その生産地産のものを主として、それに直接技術的影響を受けた周辺および地方の窯のものも含め「系」として示した。また、より具体的生産地として窯を限定できるものについては、秋田の在地窯の白岩窯等のように示した。

5　陶磁器の年代については、各生産地における編年区分を用いるとともに、より年代を限定できるものについては、西暦で年代を示した。また、窯を限定できるものについては、生産・操業期間に基づ

き年代を示した。

6　陶磁器類の編年区分については、主要生産地については生産地の編年区分を示した。肥前系については大橋氏による編年の時期区分を示した。なお、肥前系陶磁器の時期区分は次のとおりである（九州近世陶磁学会2000）。

Ⅰ期　1580～1610年代（Ⅰ－１期　1580～1594年頃、Ⅰ－２期　1594～1610年代に細分）

Ⅱ期　1600～1650年代

（磁器についてはⅡ期から開始。Ⅱ－１期　1610～1630年、Ⅱ期－２期　1630～1650年代に細分）

Ⅲ期　1650～1690年代

Ⅳ期　1690～1780年代

Ⅴ期　1780～1860年代

表1

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	特徴
1	第11図	２層	LN～LR－52～53	磁器	碗	肥前系	19世紀前半	染付
2	第11図	２層	〃	磁器	碗	瀬戸	20世紀	染付、「瀬729」印、統制品
3	第11図	２層	〃	磁器	皿	不明	19世紀前半	染付
4	第11図	２層	〃	磁器	皿	不明	幕末以降	染付
5	第11図	２層	〃	磁器	皿	肥前系	19世紀中葉	染付、焼継痕
6	第11図	２層	〃	磁器	皿	不明	明治以降	銅版型紙刷り
7	第11図	２層	〃	磁器	鉢	不明	明治以降	銅版型紙刷り、西洋コバルト
8	第12図	３層	〃	陶器	甕	不明	江戸後期	内外面鉄釉、なまこ釉
9	第12図	３層	〃	陶器	鉢	白岩焼	江戸後期	内外面鉄釉、なまこ釉
10	第12図	３層	〃	磁器	碗	肥前系	17世紀前葉	染付、福壽
11	第12図	３層	〃	磁器	碗	肥前系	17世紀中葉	染付
12	第12図	３層	〃	磁器	碗	肥前系	18世紀前半	染付
13	第12図	３層	〃	磁器	碗	肥前系	18世紀前判	染付け、コンニャク印判
14	第12図	３層	〃	磁器	碗	肥前系	18前～中	染付
15	第12図	３層	〃	磁器	碗	肥前系	18後～19初	外青磁、染付
16	第12図	３層	〃	磁器	碗蓋	肥前系	幕末	染付、端反碗蓋
17	第12図	３層	〃	磁器	碗	肥前系	19世紀	染付、焼継痕
18	第12図	３層	〃	磁器	碗蓋	不明	18世紀	染付、端反碗蓋
19	第12図	３層	〃	磁器	碗	瀬戸・美濃系	19世紀	染付
20	第12図	３層	〃	磁器	碗	瀬戸・美濃系	19世紀	染付
21	第13図	３層	〃	磁器	皿	肥前系	17後～18	染付、口紅
22	第13図	３層	〃	磁器	皿	肥前系	17世紀中葉	染付
23	第13図	３層	〃	磁器	皿	肥前系	18世紀前半	染付
24	第13図	３層	〃	磁器	皿	肥前系	18世紀前半	染付
25	第13図	３層	〃	磁器	皿	肥前系	18中～後	染付
26	第13図	３層	〃	磁器	皿	肥前系	18後～19前	染付
27	第13図	３層	〃	磁器	皿	肥前系	19世紀	染付
28	第13図	３層	〃	磁器	皿	不明	19世紀	染付
29	第13図	３層	〃	磁器	皿	不明	19世紀	染付、「宣徳大明」銘
30	第13図	３層	〃	磁器	皿	肥前系	17世紀中葉	染付
31	第14図	３層	〃	磁器	皿	不明	幕末	染付、「乾」(篆書体)銘
32	第14図	３層	〃	磁器	段重	肥前系	18世紀	染付、焼継痕
33	第14図	３層	〃	磁器	段重	肥前系	18世紀	染付
34	第14図	３層	〃	磁器	鉢	不明	19世紀	染付、蓋付鉢か
35	第14図	３層	〃	磁器	鉢	不明	明治期	蛇の目凹形高台、コバルト
36	第14図	３層	〃	磁器	油壺	肥前系	19世紀前半	染付
37	第14図	３層	〃	磁器	仏飯器	肥前系	17世紀後半	染付
38	第14図	３層	〃	磁器	盃	不明	19世紀	染付
39	第14図	３層	〃	磁器	碗	瀬戸・美濃系	20世紀	「岐69」印、統制品

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	特徴
40	第14図	３層	LN～LR－52～53	磁器	皿	肥前	20世紀	「有82」印、統制品
41	第14図	４層	〃	陶器	鉢	不明		
42	第15図	三の丸造成土	MD－49～50	陶器	碗	肥前系	17後～18膳	刷毛目文
43	第15図	三の丸造成土	〃	陶器	皿	肥前系	17前	灰釉、砂目積み
44	第15図	三の丸造成土	〃	陶器	鉢	不明		鉄釉
45	第15図	三の丸造成土	〃	磁器	碗	肥前系	17世紀後半	染付
46	第15図	三の丸造成土	〃	磁器	碗	肥前系	18世紀前半	染付
47	第15図	三の丸造成土	〃	磁器	鉢	肥前系	18世紀前半	染付
48	第15図	三の丸斜面	MB～MC－50	磁器	碗	肥前系	18後－19前	染付、コンニャク印判の五弁花
49	第15図	三の丸斜面	〃	磁器	碗	肥前系	19前～後	染付
50	第15図	三の丸斜面	〃	磁器	碗	不明		形紙刷り
51	第15図	三の丸斜面	〃	磁器	皿	肥前系	17世紀前半	染付
52	第15図	三の丸斜面	〃	磁器	皿	肥前系	18世紀前半	染付
53	第16図	三の丸斜面	〃	磁器	皿	肥前系	18世紀前半	見込み部蛇の目釉剥ぎ
54	第16図	三の丸斜面	〃	磁器	皿	肥前系	18世紀前～中	染付
55	第16図	三の丸斜面	〃	磁器	皿	肥前系	18世紀前～中	染付
56	第16図	三の丸斜面	〃	磁器	皿	肥前系	18世紀前～中	
57	第16図	三の丸斜面	〃	磁器	皿	肥前系	18後～19初	蛇の目凹形高台、「冨貴長春」銘

表2　木製品属性一覧

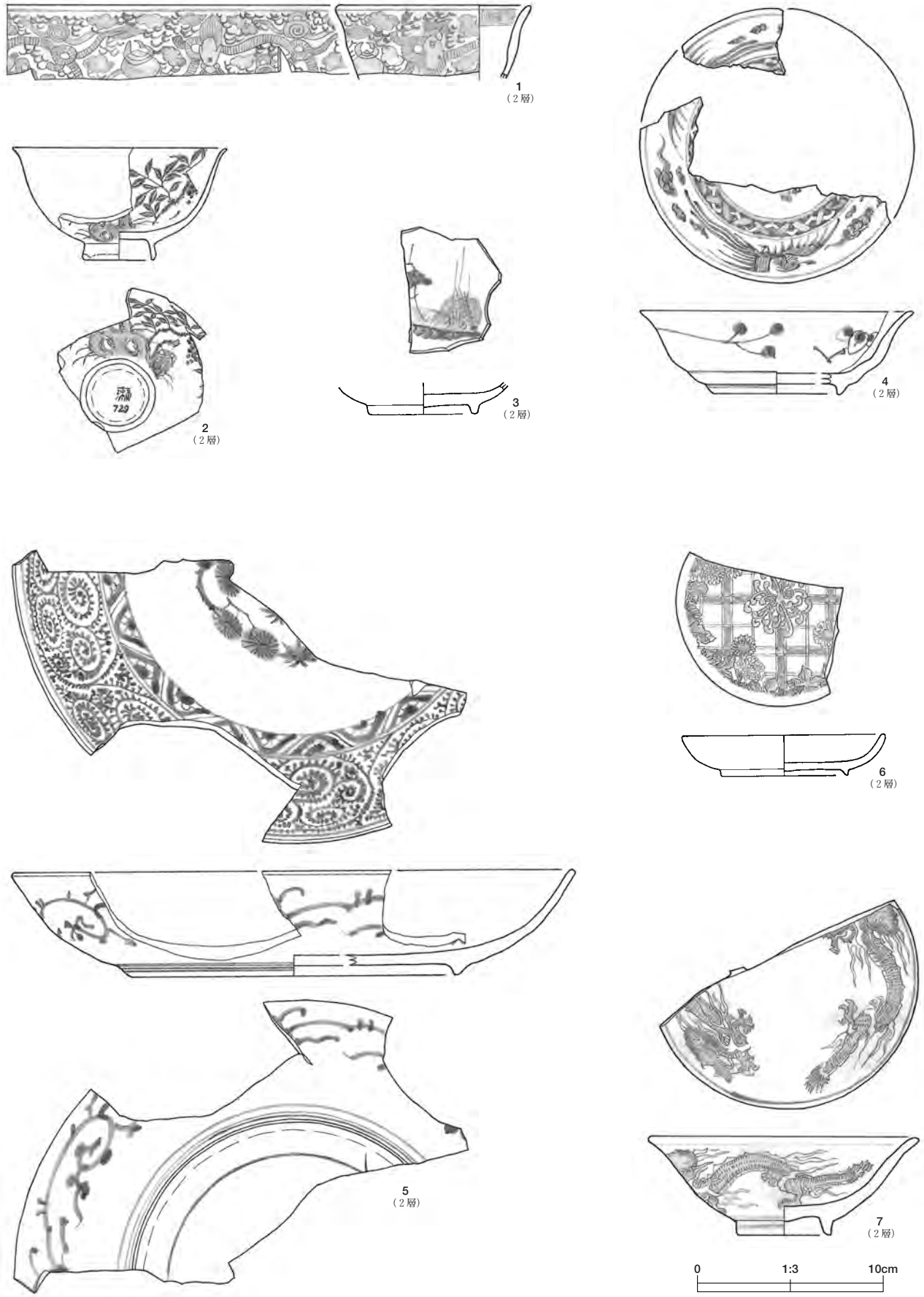
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	器種	備考
1	第17図	堀内・２層	LN～LR－52～53	連歯下駄	丸型
2	第17図	堀内・３層	〃	角型連歯下駄	3つの孔があり、別の用途に用いられた可能性有り
3	第17図	堀内・２層	〃	刳り下駄	
4	第17図	堀内・２層	〃	刳り下駄	丸型、内面に漆塗布
5	第17図	堀内・３層	〃	露卯下駄	
6	第17図	堀内・３層	〃	露卯下駄差歯	
7	第18図	堀内・２層	〃	箸	
8	第18図	堀内・２層	〃	箸	
9	第18図	堀内・２層	〃	箸	
10	第18図	堀内・２層	〃	箸	
11	第18図	堀内・２層	〃	箸	
12	第18図	堀内・２層	〃	箸	
13	第18図	堀内・２層	〃	箸	
14	第18図	堀内・２層	〃	箸	
15	第18図	堀内・２層	〃	箸	
16	第18図	造成土	〃	曲物	底部欠損
17	第18図	堀内・３層	〃	曲物底部	
18	第18図	堀内・３層	〃	取手	用途不明

表3　銭貨属性一覧

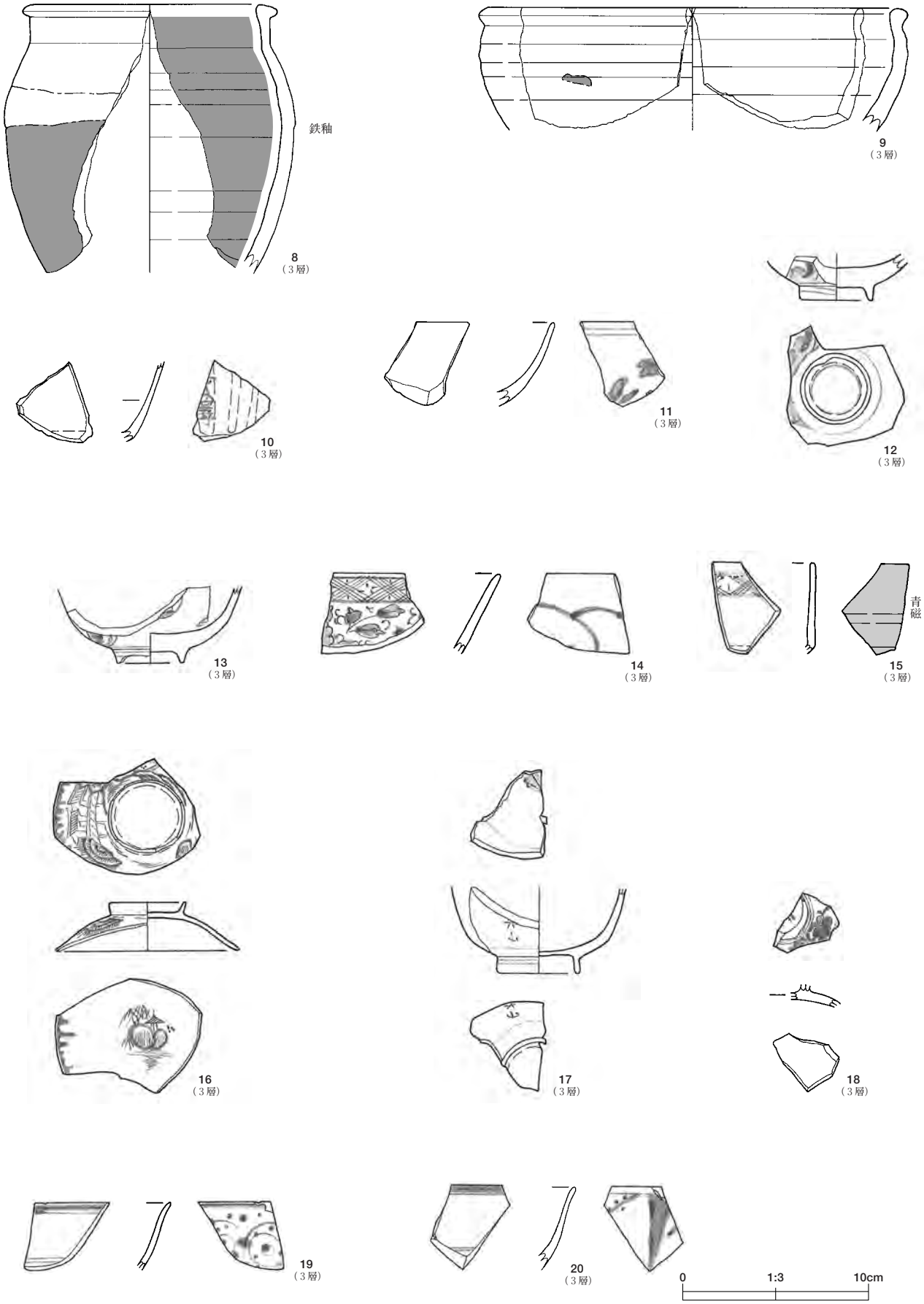
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	銭貨名	分類	素材
1	第20図	２層	LN～LR－52～53	寛永通寶	新寛永	銅

表4　瓦属性一覧

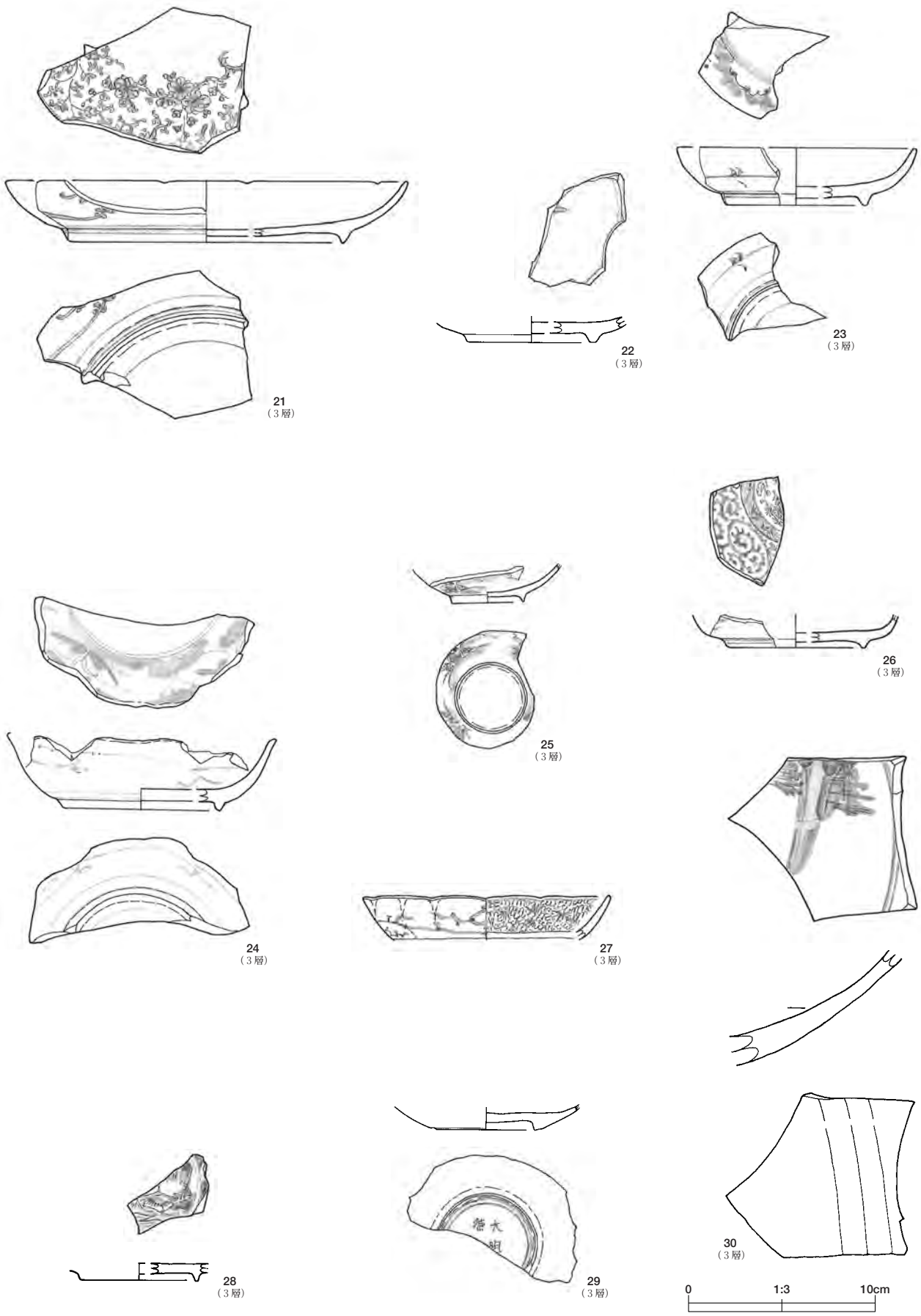
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類
1	第19図	２層	LN～LR－52～53	桟瓦（釉瓦）
2	第19図	２層	〃	桟瓦（釉瓦）
3	第19図	２層	〃	桟瓦（釉瓦）
4	第19図	２層	〃	桟瓦（釉瓦）
5	第19図	２層	〃	桟瓦（いぶし瓦）



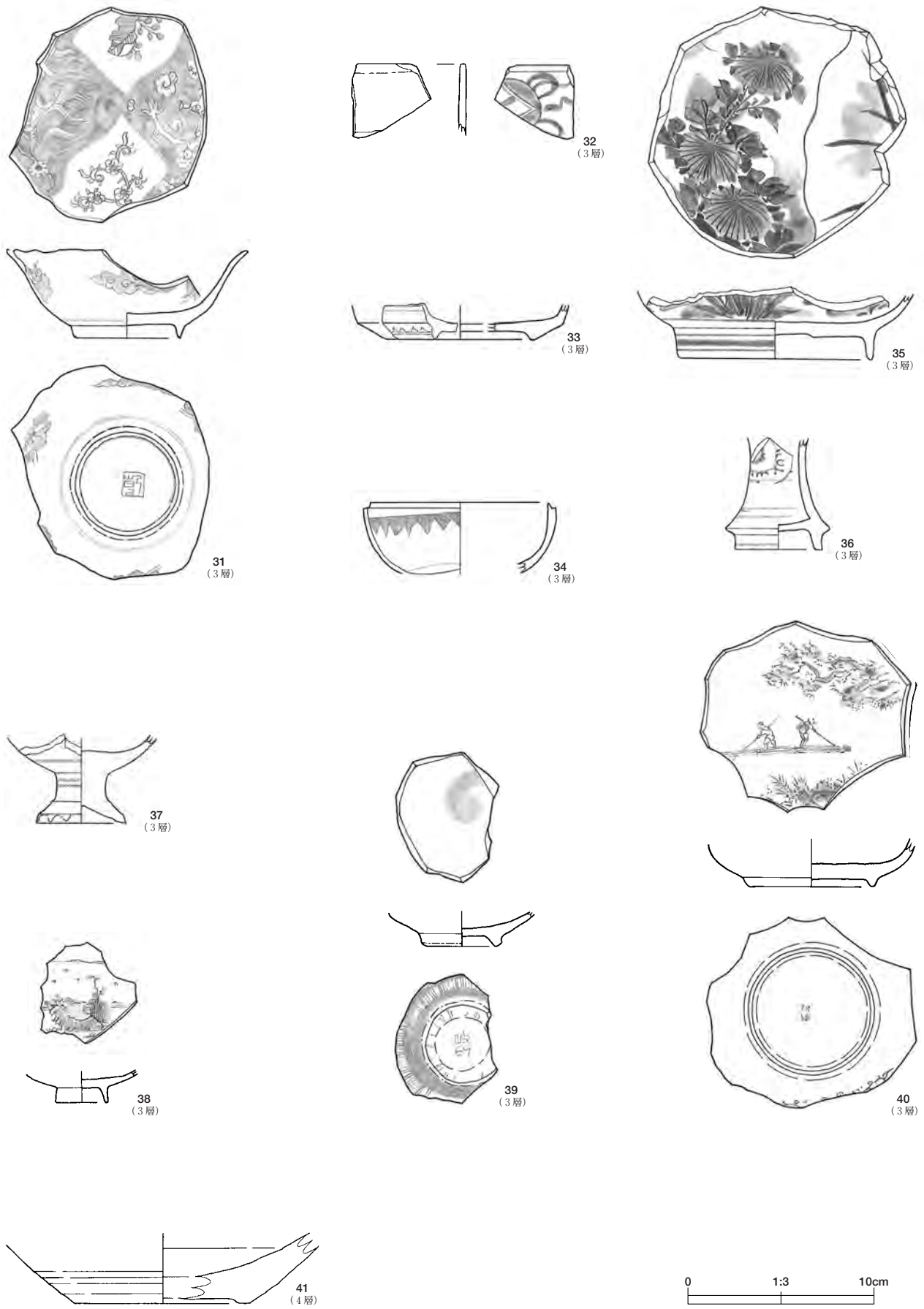
第11図　堀跡内（第２層）出土遺物



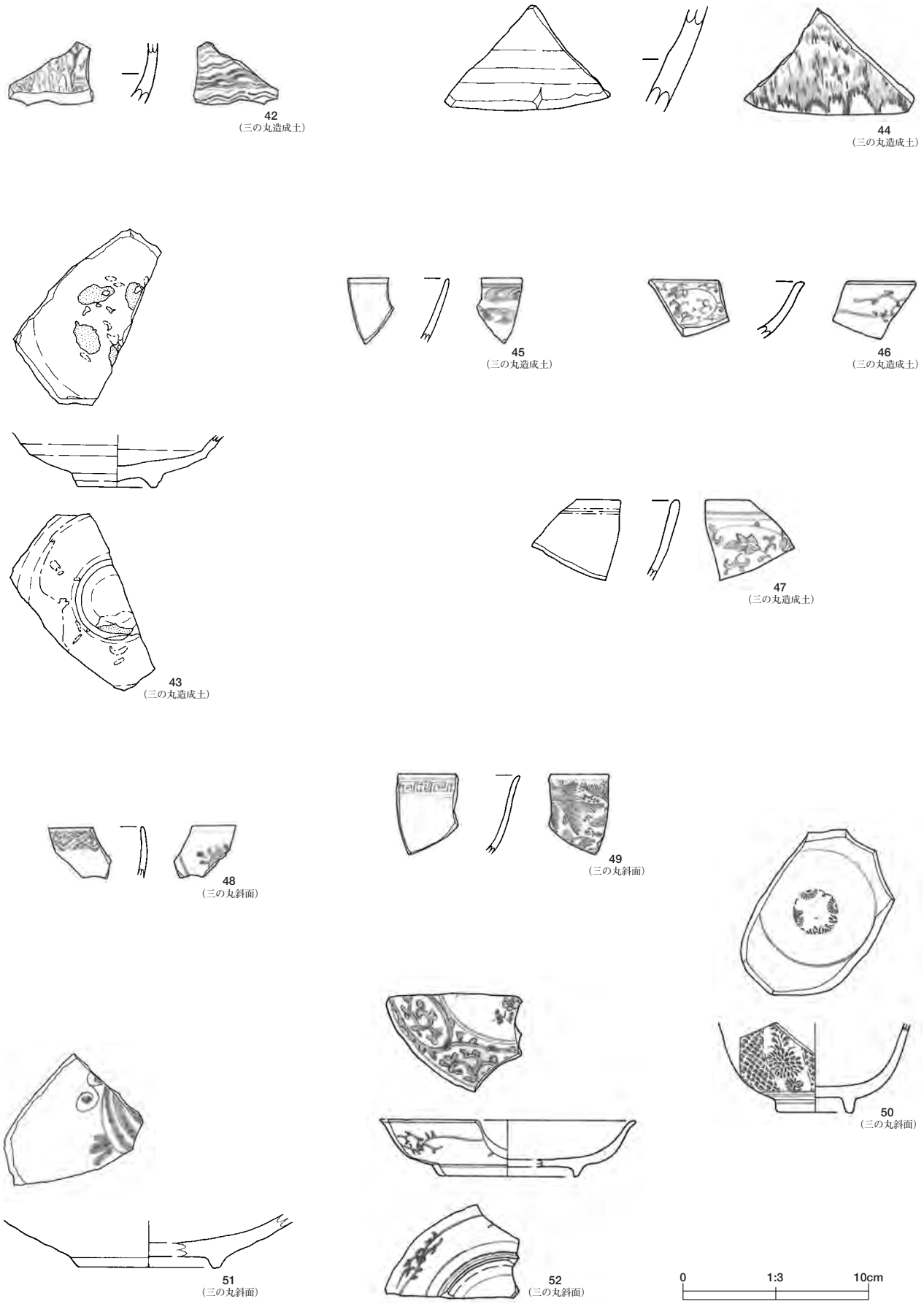
第12図　堀跡内（第２層・第３層）出土遺物



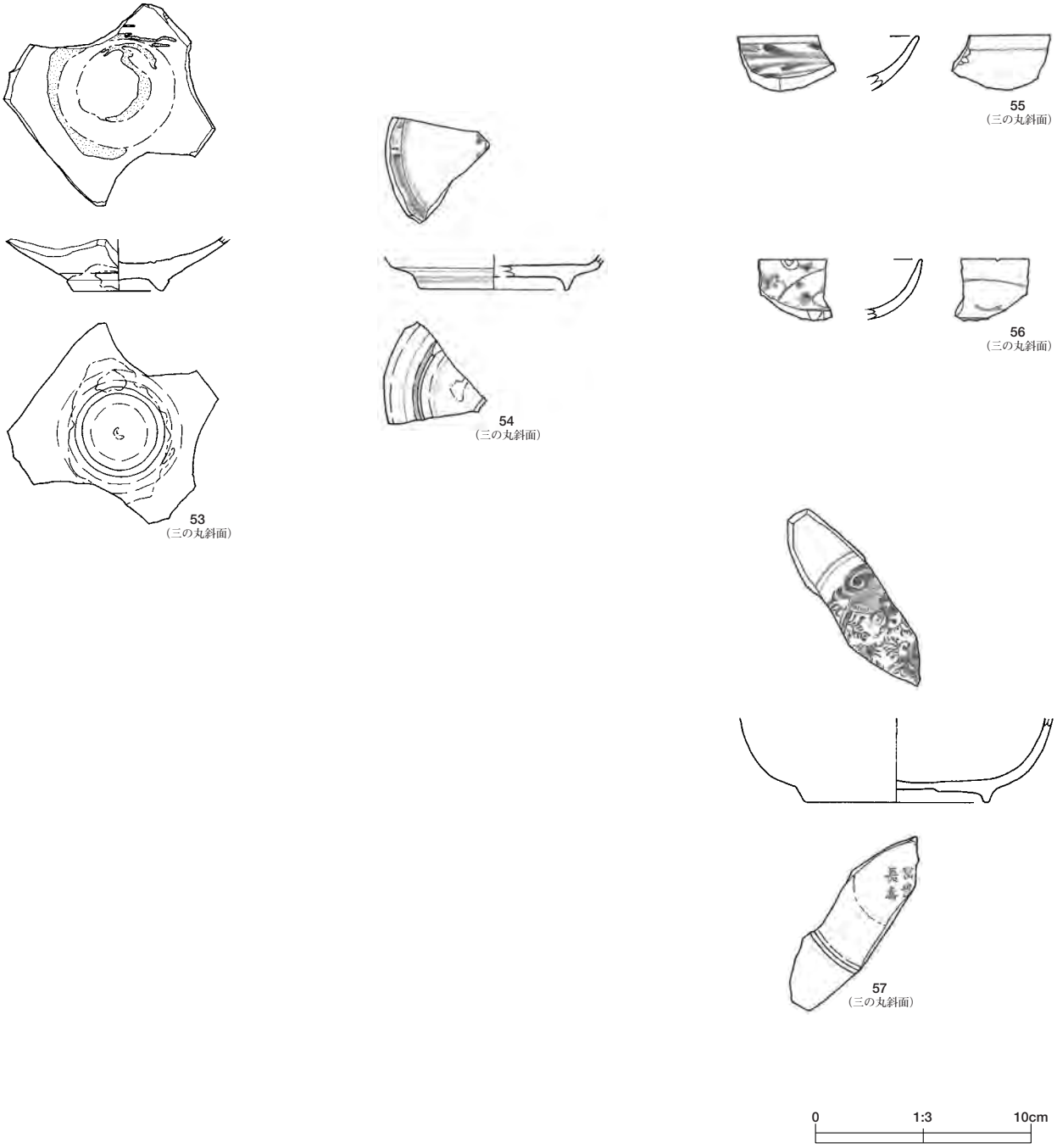
第13図　堀跡内（第３層）出土遺物



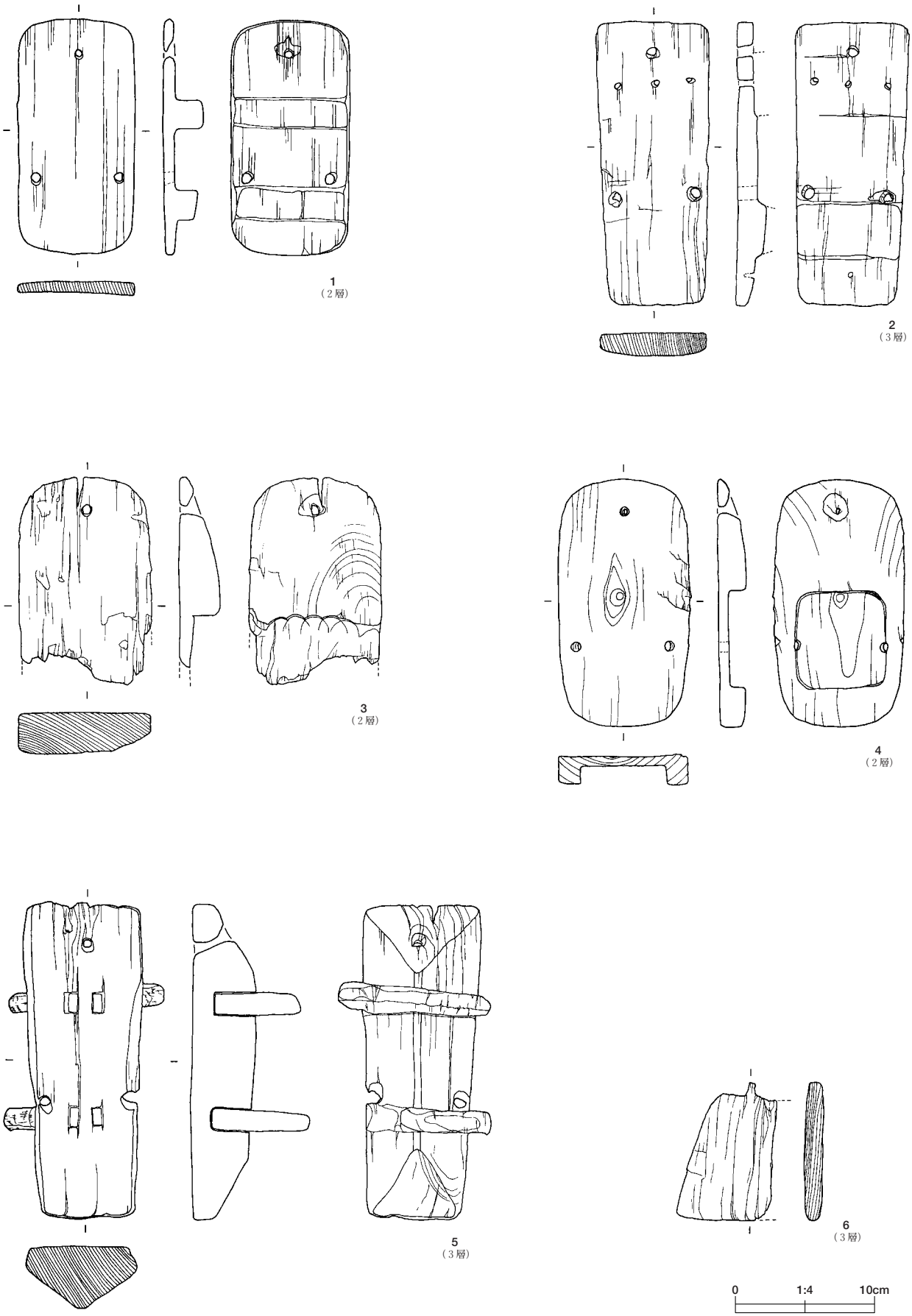
第14図　堀跡内（第３層・第４層）出土遺物



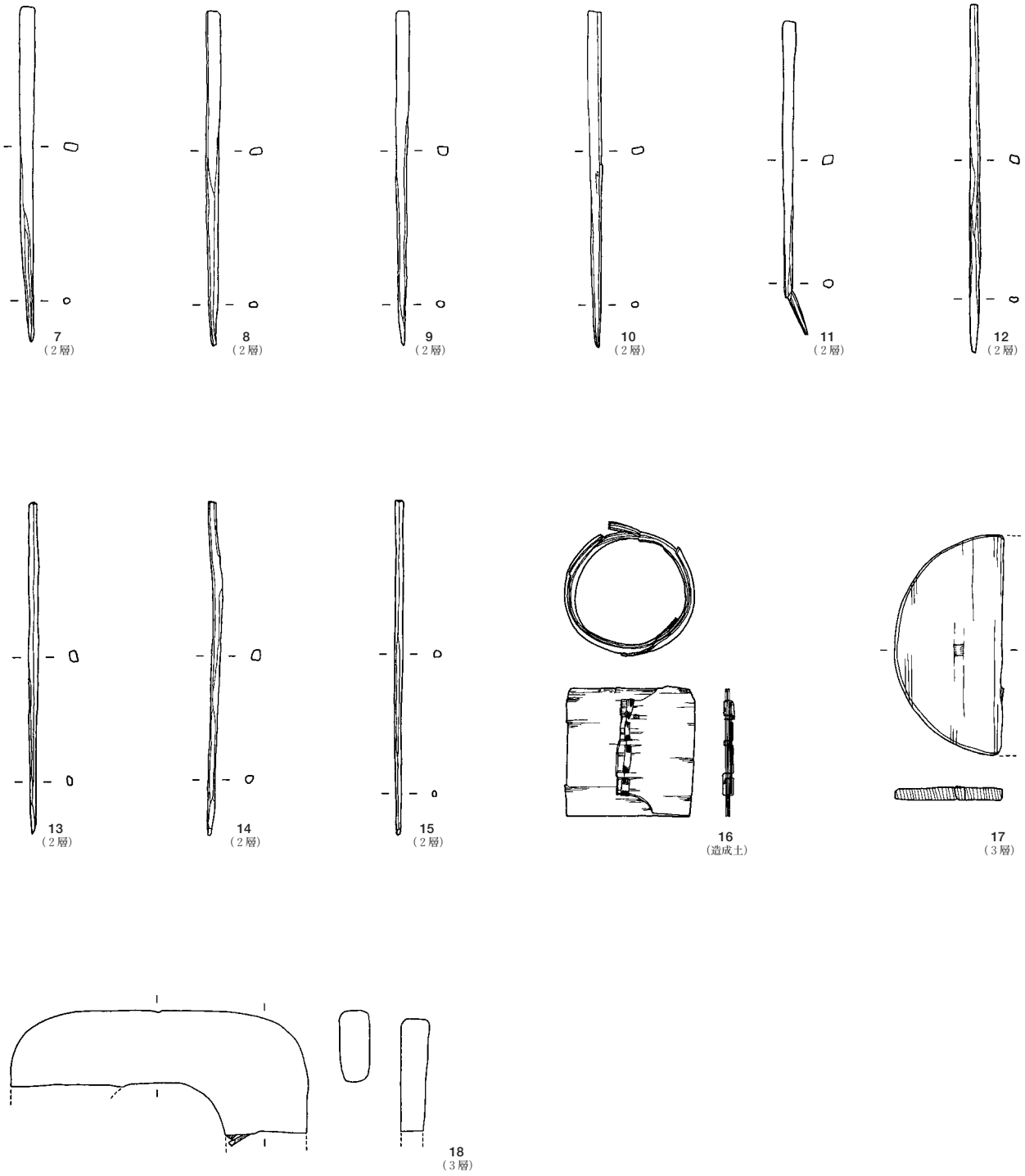
第15図　遺構外出土遺物



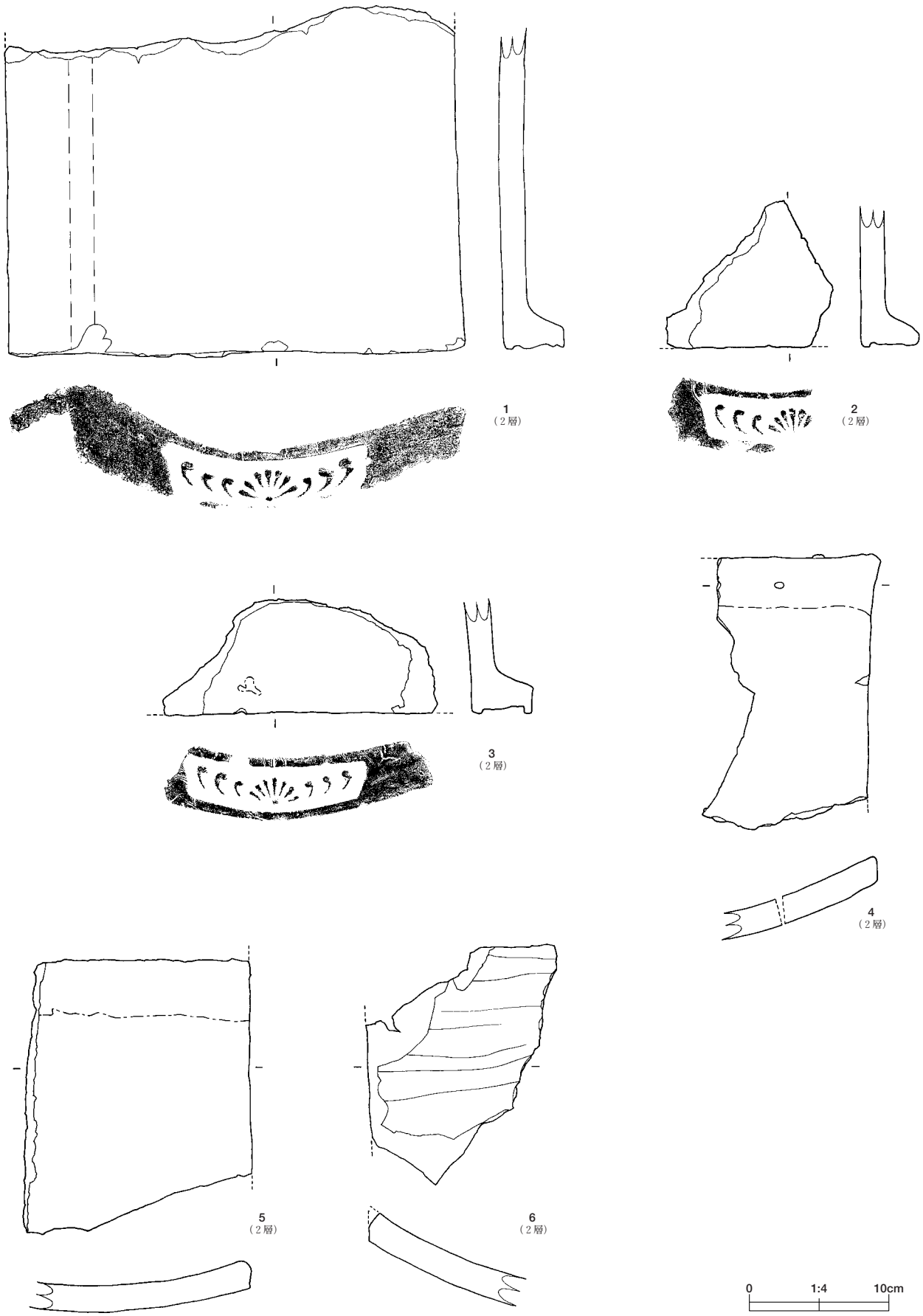
第16図　遺構外出土遺物



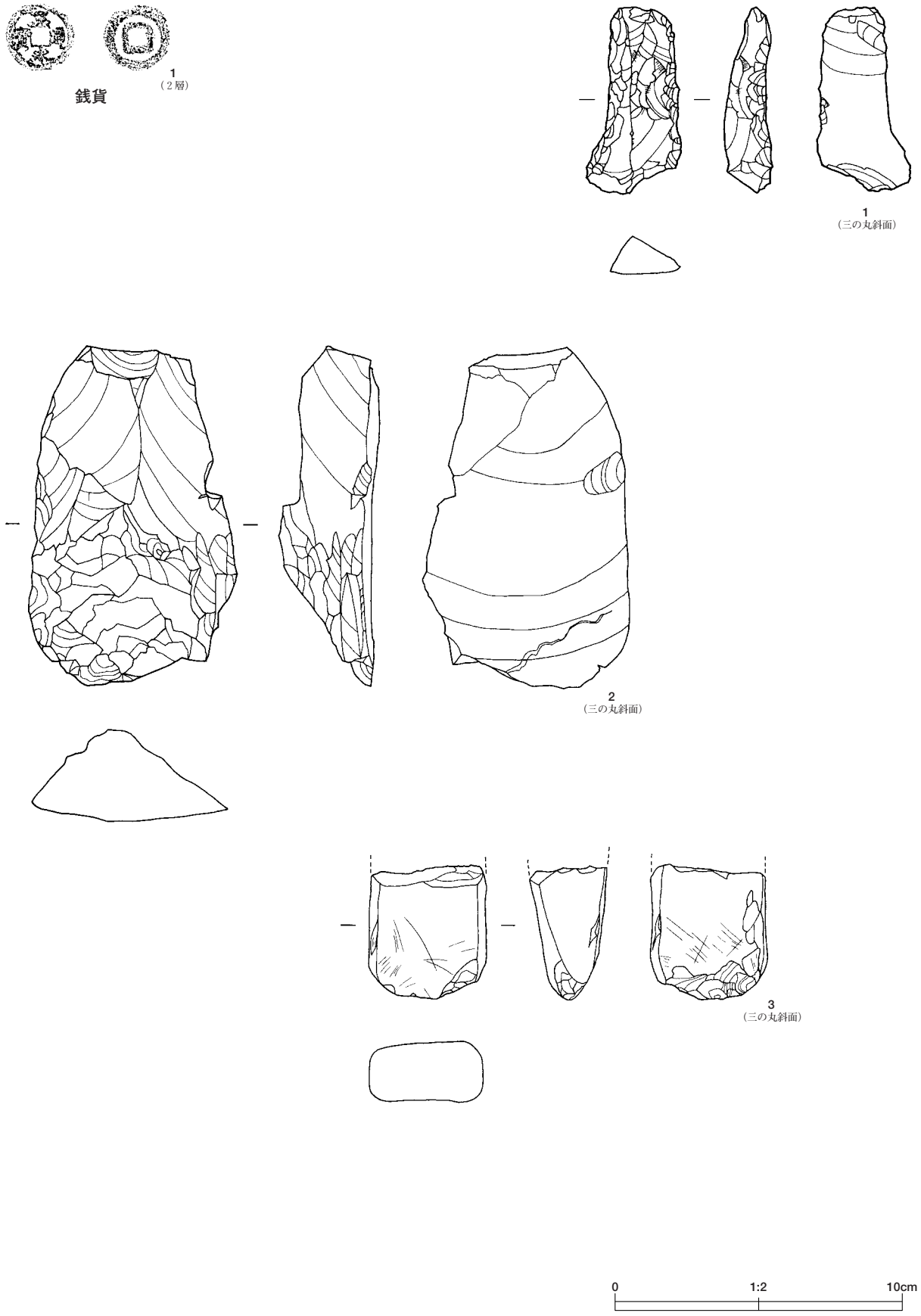
第17図　堀跡内出土木製品



第18図　堀跡内出土木製品



第19図　堀跡内出土遺物瓦



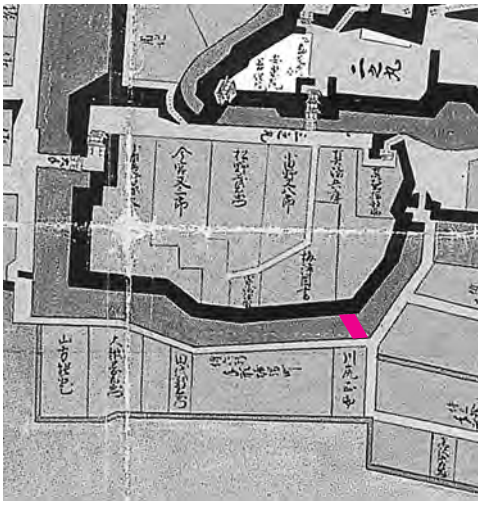
第20図　堀跡内出土銭貨・遺構外出土石器

第４章　まとめ

第１節　検出遺構について

（１）堀跡について

外堀の幅については、文献でも詳しく記載されているものは少ない。その中で『国典類抄』第12巻賓部２に、宝暦９年(1759)の国目付に提出した書状に「本丸より東外堀北南長折廻五百弐拾間幅八間より拾三間迄不同」とあり、部分により約14ｍから約23ｍの幅であったといわれている。一方、大手門の堀、穴門の堀については、同書で「本丸より南外堀長西東百拾四間幅三拾九間より弐拾五間迄不同」とあり、幅は約70ｍから45ｍであり、南側の堀ほど大規模に構築していることが分かる。



（秋田市立佐竹史料館蔵）

久保田城下絵図　嘉永２年５月

今回の調査では矢板によって囲まれた幅７ｍ×長さ40ｍの範囲内で外堀が検出された。幅33ｍ、長さが７ｍ以上、深さ２～５ｍの規模であり、西側では堀の立ち上がりが明確に認められ、護岸であることが確認された。幅については、この西護岸部から東側に33ｍ程確認できたが、東側の護岸が確認されないことから、さらに東を走る市道方向に延びているものと考えられる。また、堀底部は東側にむかって水平に続いた後、約19ｍ付近から一段下がって掘り込まれ、市道部分に続くことが分かった。底部より上層には幾層もの植物腐植土と灰白色粘土が堆積しており、観察結果から堀内に埋まった土砂や植物が形成したものと考えられる。調査区東側では上層部分で堆積状況の一部が斜めに立ち上がるような形で変化する箇所が確認されたが、堀内の堆積層であり性格については不明である。

（２）杭列について

調査地西側の堀の立ち上がり部の斜面（護岸）に２列の杭が打ち込まれていた。平成15年に秋田県埋蔵文化財センターが調査を実施した大手門および穴門の堀の調査[注1]や、堀周辺調査の結果からこの周辺がもともと湿地帯であり、城下町形成に当たっては土を盛り造成していることが分かっている。大手門および穴門の堀構築の際には、堀を掘削してでた土を利用し斜面に筵を敷き杭を打ち込み、貼り付けて護岸部とし、土砂の流出を防いだものと考えらている。

１号杭列は三の丸台地斜面下で確認された。調査地西側の斜面は急傾斜をなしているが、杭はまっすぐに打ち込まれ、ほぼ直線をなしている。地上部分、地下部分とも約20㎝しか残っておらず、杭の残存部分はわずかである。２号杭列は堀の護岸部斜面に位置し、南北方向に不規則に打ち込まれていた。今回の調査では杭は護岸部の斜面に対しまっすぐ、あるいは斜めに打ち込まれており、杭検出面の層の確認では筵とみられる腐植土層は検出されなかった。１・２号杭列とも杭列を利用して柵を組み、大手門および穴門の堀にみられるような斜面上部からの土砂の流出を防ぐために設けられた杭列の一部と考えられる。遺物は出土しなかったことから構築年代は不明である。

第２節　出土遺物について

（１）土器・陶磁器について

陶器は灰釉や鉄釉等の施釉陶器や無釉の焼締め陶器などが出土している。磁器は染付・青磁等が出土している。器種構成としては、碗・皿・鉢類などの食膳具、甕・壺などの貯蔵具、仏飯器等の調度品などがある。

陶磁器類について年代を問わず、生産地の同定が可能なものについて分類を行うと以下のようになる。

①肥前系（唐津系）

九州肥前系地方の窯で生産されたものおよび肥前の技術・技法を直接取り入れて周辺の窯で生産されたものである。出土陶磁器の中ではもっとも出土量が多く、大半を占める生産地である。陶器は1610年代～1650年代の灰釉溝縁皿や碗などがある。その他として鉢・甕等がみられる。

磁器は17世紀前葉の染付碗、17世紀中葉の染付け皿に始まり、現代の染付け碗・皿までみられる。その中でも18世紀台の染付け皿が最も出土量が多い。機種構成としては碗・皿・段重・鉢・油壺などがある。種類としては染付けが主体をなし、青磁碗が１個出土している。生産地が明確なものとして、波佐見周辺の窯の製品、有田周辺の窯のものもみられる。

②瀬戸美濃系

美濃を含めた愛知県瀬戸地方周辺で生産されたものである。

磁器は、19世紀代の碗が出土している。また、戦時中に統制品として制作された産地を示す漢字１字と数字の組み合わせたものも出土している。

③白岩窯

秋田県仙北市（旧仙北郡角館町白岩）に所在した近世陶器窯で、明和８年(1771)の生産開始とされる（渡辺[注2]1979）。技術系譜では相馬焼の影響を受けて始まり、京焼や楽焼の技術も加味されているという。薄く鉄釉を全面に施した後になまこ釉を施す特徴がある。鉢が出土している。

（２）木製品について

木製出土遺物は少量であり、飲食器として箸、容器として曲げ物・蓋、履物として下駄が出土している。下駄は一木下駄と露卯下駄が確認され、一木下駄には連歯下駄と刳り下駄のタイプがみられる。

第３節　おわりに

今回の調査では、外堀の状況確認を目的とした発掘調査であったが、目的のひとつである外堀の幅は確認されなかった。しかし、堀跡の西護岸部が確認され、絵図等では描かれることのなかった堀の一部が確認できたことは大きな成果であった。これまでも周辺地区の調査で、藩政時代の武家屋敷跡等が検出され近世の町の様子が徐々にではあるが分かってきた。今後も周辺の土地区画整理事業に伴い行われる埋蔵文化財調査により、堀の状況や、内町の町割りなど久保田城を取り巻く近世の町の姿を解明していく必要がある。

注１　利部修 2006 『久保田城跡・藩校明徳館跡－秋田中央道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第412集 秋田県埋蔵文化財センター

注２　渡辺爲吉 1979 『白岩瀬戸山』（復刻版）

〔第３、４章 引用・参考文献〕

江戸遺跡研究会編 2001 『図説　江戸考古学研究事典』柏書房

大橋康二 2000 『肥前陶磁』ニューサイエンス社

小野正敏 1982 「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』２ pp.71-88

九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』

古泉弘 1987 『江戸の考古学』ニューサイエンス社

小松正夫・日野久 1991 『寺内焼窯跡－寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査－』秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所

利部修他 2005 『東根小屋町遺跡－秋田県教育・福祉複合施設整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第387集 秋田県埋蔵文化財センター

鋤柄俊夫他 1994 『大阪城跡の発掘調査４』大阪城発掘調査概要７ 財団法人 大阪文化センター

瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史　陶磁史編４』

瀬戸市史編纂委員会 1998 『瀬戸市史　陶磁史編６』

瀬戸市埋蔵文化財センター編 2001 『瀬戸大窯とその時代』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念企画展図録

瀬戸市埋蔵文化財センター編 2002 『江戸時代の瀬戸窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録

瀬戸市埋蔵文化財センター編 2003 『江戸時代の美濃窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録

瀬戸市埋蔵文化財センター編 2004 『江戸時代の瀬戸・美濃窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録

瀬戸市埋蔵文化財センター編 2006 『江戸時代の瀬戸・美濃－三都と名古屋－』平成17年度瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録

田口昭二 1983 『美濃焼』ニューサイエンス社

羽柴直人 1994 「東北地方北部における近世陶磁器の様相－1690～1780の消費状況の集成－」『（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』ⅩⅣ pp.95-118

安田忠市他 2002 『藩校明徳館跡－市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書－』秋田市教育委員会

写 真 図 版

久保田城三の丸堀跡遠景（南から）

三の丸堀跡近景（東から）

図版1

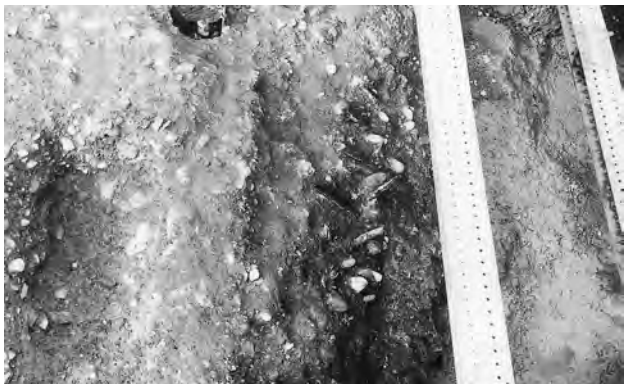
三の丸堀跡および斜面検出状況（西から）

三の丸堀跡内最深部（東から）

図版2

1号杭列検出状況（南から）

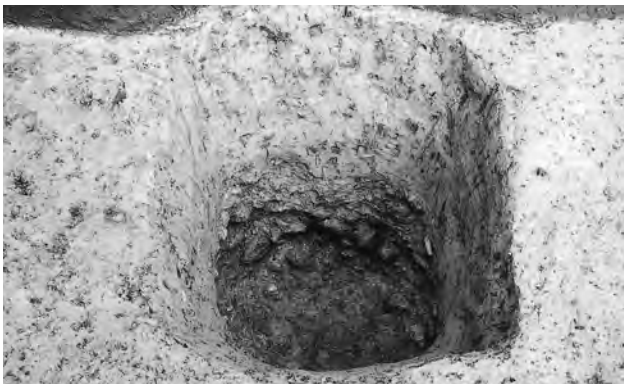
2号杭列検出状況（南から）



2号杭列検出状況（南から）

2号杭列検出状況（東から）

2号杭列検出状況（南から）



1号土坑完掘状況（南から）

1号土坑半截状況（東から）

東端部平坦地（第11層面）

図版3

東端部平坦地（第11層面）

東端部平坦地断面

三の丸斜面全景（東から）

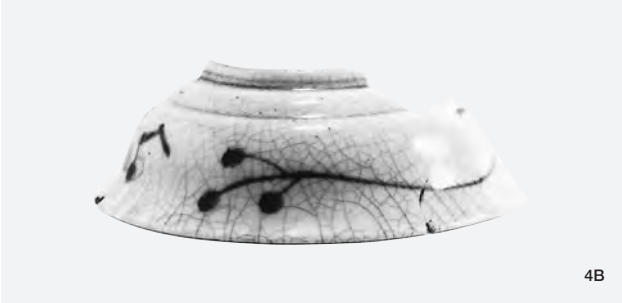
三の丸斜面土層断面（東から）

三の丸斜面土層断面（上層）東→西

三の丸斜面土層断面（上層）

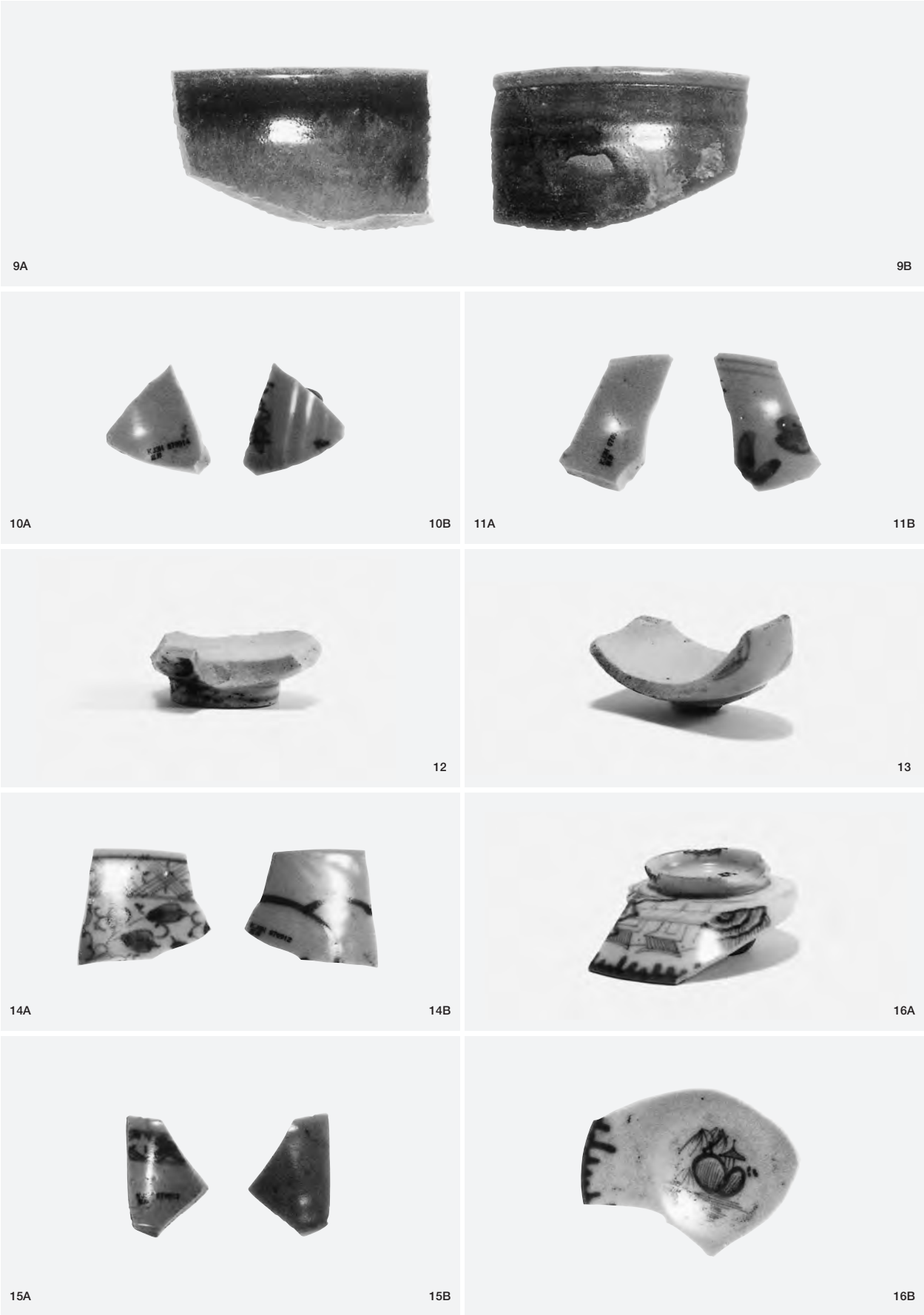
三の丸斜面～台地土層断面

図版4



1～8　遺構内出土遺物

図版5

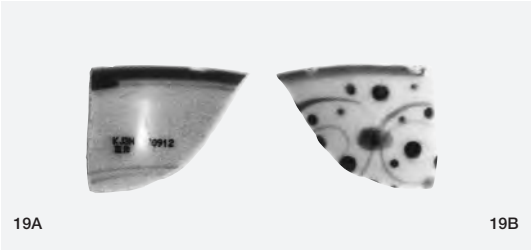


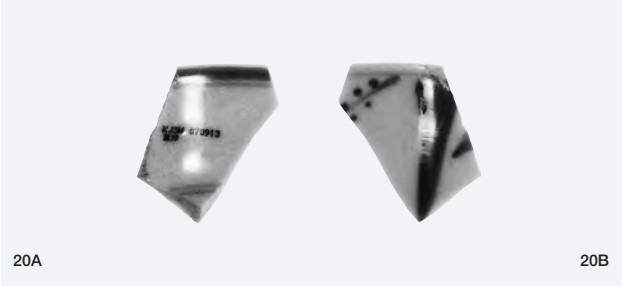
9～16　遺構内出土遺物

図版6

17

18

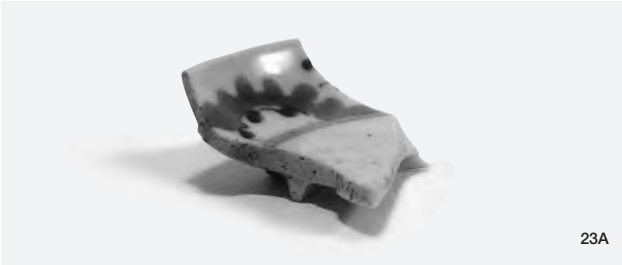

19A 19B

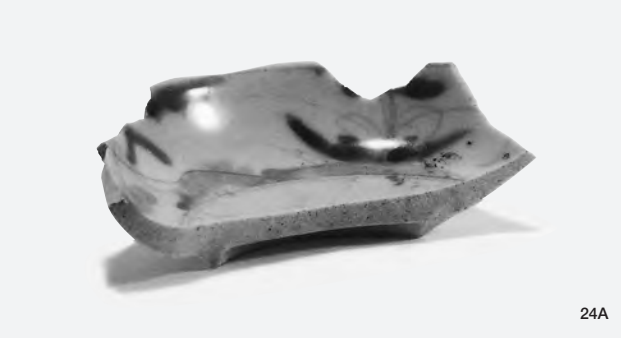

20A 20B

21A

22

21B


23A


24A

23B

24B

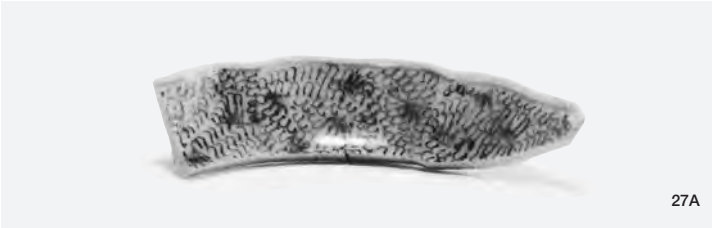
25A

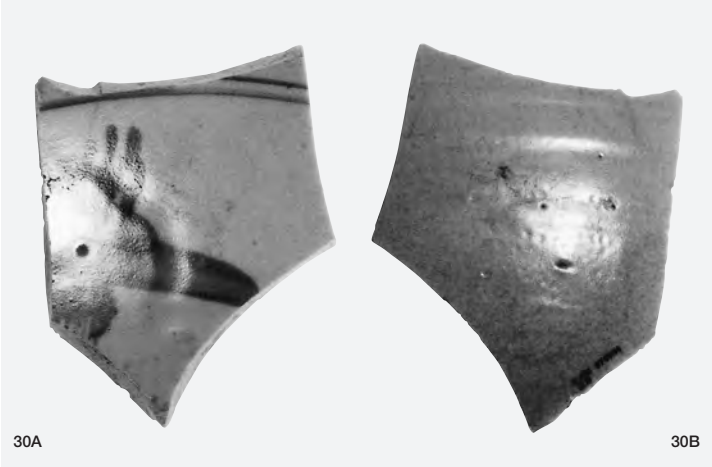
25B

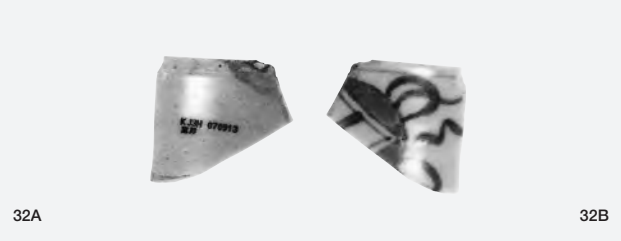
26

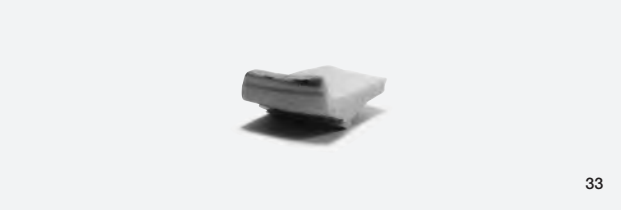
17～26　遺構内出土遺物

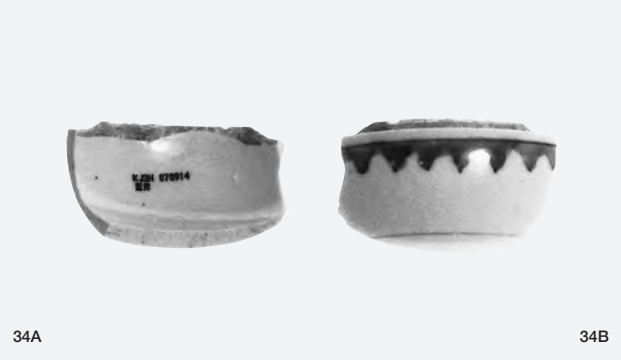
図版7











27～34　遺構内出土遺物

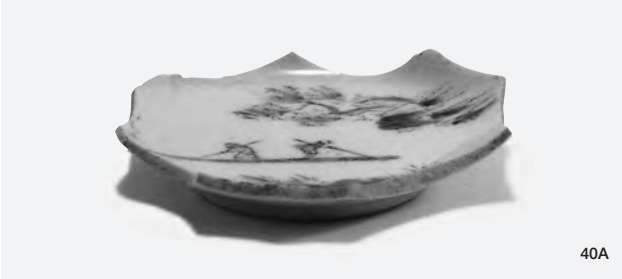
図版8

35

36

37

38

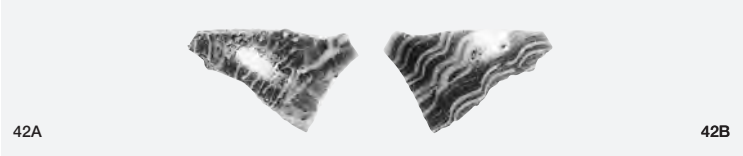

40A

39A

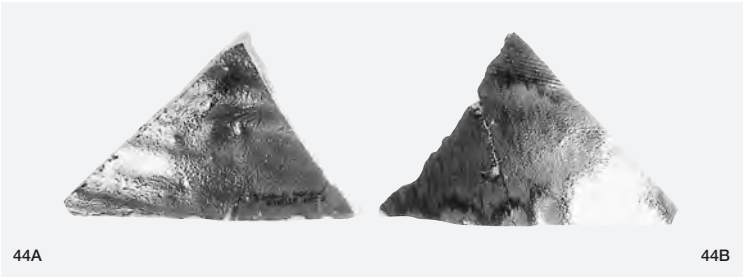
40B

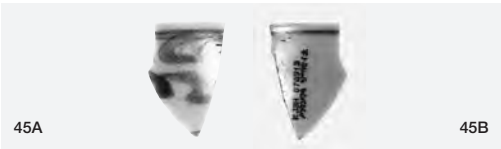
39B

41


42A 42B

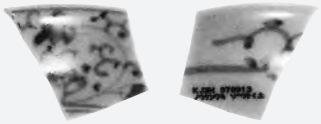
43


44A 44B

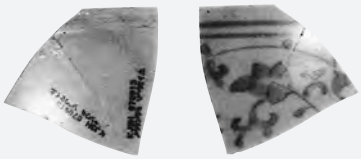

45A 45B

35～45　遺構内・遺構外出土遺物

図版9


46A 46B

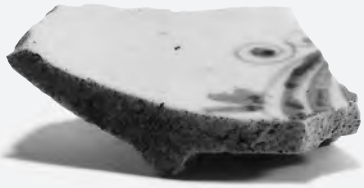
48A 48B


47A 47B

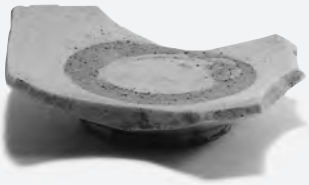
49A 49B

50

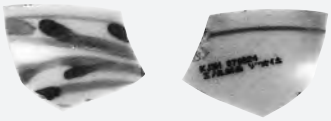
52A


51

52B


53

54


55A 55B

57

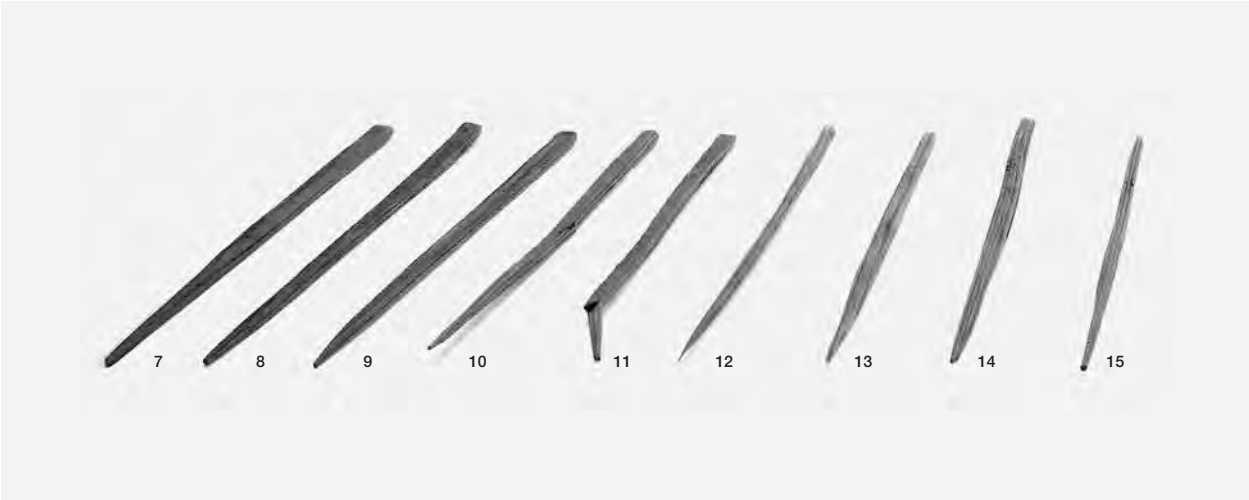
56A 56B

46～57　遺構外出土遺物

図版10

1～4　遺構内出土遺物

図版11



5～18　遺構内出土遺物

図版12

1～6　遺構内出土遺物

図版13

報　告　書　抄　録

ふりがな	くぼたじょうあと
書名	久保田城跡
副書名	秋田駅西北地区土地区画整理事業都市計画道路千秋久保田町線に伴う三の丸堀跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西谷隆
編集機関	秋田市教育委員会
所在地	〒010-0951 秋田県秋田市山王二丁目1番53号山王21ビル内　TEL 018-866-2246　FAX 018-866-2252
発行年月日	2008年12月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
久保田城跡（くぼたじょうあと）	秋田市千秋久保田町（あきたしせんしゅうくぼたたまち）地内	05201	217	39° 43′ 14″	140° 7′ 41″	20070804～ 20071115	360	区画整理事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久保田城跡	城郭	近世	堀跡 杭列　2基 土坑　1基	陶器・磁器・木製品・瓦・銭貨	三の丸東側の外堀跡の調査。護岸の杭や堀の堆積層を検出。

要約	久保田城跡はＪＲ秋田駅の北西約700ｍの千秋公園を中心とする地域で、本丸東側台地が三の丸地区になっている。この三の丸を取り囲むように巡らされているのが外堀である。今回の調査で岸の一部や護岸用の杭などが確認された。

秋　田　市
久　保　田　城　跡
－秋田駅西北地区土地区画整理事業都市計画道路
千秋久保田町線に伴う三の丸堀跡発掘調査報告書－

印刷・発行　平成20年12月
編集・発行　秋田市教育委員会
〒010-0951
秋田市山王二丁目１番53号　山王21ビル内
TEL 018-866-2246 FAX 018-866-2252
印　　刷　有限会社 タイヨー商会